

2023 年度 修士論文

ポゼッションとハイプレスの戦術から見た
Jリーグと欧州のサッカーの違い

The Differences between J-League and European Football
in terms of Tactics of Possession and High Pressing

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科
スポーツ科学専攻 トップスポーツマネジメントコース

5023A318-8 土屋 健太郎

担当指導教員 平田 竹男 教授

目次

第1章	背景	1
第1節	日本人選手の海外挑戦	1
第1項	日本人サッカー選手の欧州への挑戦	1
第2項	日本人選手のビッグクラブ挑戦	5
第2節	世界の戦術的潮流	6
第1項	ポゼッションサッカー	6
第2項	ハイプレスサッカー	7
第3項	戦術的な融合	7
第3節	本研究の問題意識	8
第1項	欧州クラブへの定着への課題	8
第2項	欧州ビッグクラブへの定着への課題	8
第3項	リサーチクエスション	11
第4節	先行研究	11
第5節	目的	12
第2章	方法	13
第1節	方法	13
第1項	ビッグクラブの定義	13
第2節	インタビュー調査	14
第1項	インタビュー調査の対象	14
第2項	インタビュー調査内容	18
第3項	研究倫理	18
第3節	日本と欧州クラブのボール奪取の違い	18
第1項	日本と欧州の「ボール奪取」に関する定量的把握	18
第4節	欧州のビッグクラブと中位・下位クラブの戦術的違い	21
第1項	ボール奪取とタッチ数の調査	21
第3章	結果	23
第1節	インタビュー調査	23
第1項	Jリーグの欧州の戦術的な違い	23
第2節	試合の内容分析	34
第1項	ビッグクラブ同士の試合の分析	34
第2項	得点パターンの分析	35
第3節	試合スタッツの分析	39
第1項	エリア別のタックル数	39

第2項	エリア別のタッチ数.....	40
第4章	考察.....	43
第1節	欧州と日本の戦術的な違い.....	43
第2節	欧州ビッグクラブの戦術的特徴.....	44
第3節	ビッグクラブにおけるハイプレスサッカーの影響.....	45
第4節	日本選手の環境.....	46
第5節	日本におけるブラジルの影響.....	47
第6節	Jリーグの夏場のプレー環境とシーズン移行.....	48
第7節	研究の限界と今後の展望.....	52
第5章	結論.....	54
参考文献	55
謝辞	58

図 1	鈴木(2019)エリアの分割の仕方	20
図 2	総走行距離の J リーグと欧州五大リーグ平均比較(出典：J リーグ公式サイト)	49
図 3	ハイインテンシティー走行距離の J リーグと五大リーグ比較(出典：J リーグ公式サイト)	50
図 4	東京の年間平均気温(出典：Weather Spark)	51
図 5	ロンドンの年間平均気温(出典：Weather Spark).....	52
図 6	ベルリンの年間平均気温(出典：Weather Spark).....	52
表 1	1998 年W杯フランス大会日本代表	2
表 2	2002 年W杯日韓大会日本代表.....	2
表 3	2006 年W杯ドイツ大会日本代表	3
表 4	2010 年W杯南アフリカ大会日本代表.....	3
表 5	2014 年W杯ブラジル大会日本代表	4
表 6	2018 年W杯ロシア大会日本代表	4
表 7	2022 年W杯カタール大会日本代表	5
表 8	遠藤選手のシーズンごとのリーグ戦戦績 (筆者作成)	9
表 9	遠藤選手の試合出場状況 2023/24 シーズン (筆者作成)	10
表 10	UEFA のクラブランキング(成績に基づいた Pt) 2020/21 年のクラブ収入(単位：百万€)	14
表 11	酒井高德選手 経歴.....	15
表 12	長澤和輝選手の経歴.....	16
表 13	スキッベ監督の経歴.....	17
表 14	攻守の切り替えに関するプレーの定義・分類.....	19
表 15	タックルに関する発言録	25
表 16	遠藤航選手に関する発言	26
表 17	プロGRESSIBに関する発言録.エラー! ブックマークが定義されていません。	
表 18	日欧のサッカー観についての発言録	33
表 19	積極的ボール奪取の割合	34
表 20	ボール奪取のエリアごとの割合	35
表 21	得点パターンの内訳.....	36
表 22	積極的なボール奪取からの得点数と、得点分類.....	37
表 23	得点につながった積極的なボール奪取の内訳.....	38
表 24	得点につながった積極的なボール奪取のエリア比較.....	38
表 25	タックルのエリアごとの割合	39

表 26	英独クラブ別タックルのエリアごと割合の上位と下位チーム	40
表 27	タッチのエリアごとの割合と、アタッキングサードなどへの進入回数.....	41
表 28	英独クラブ別タッチのエリアごと割合の上位と下位.....	42
表 29	南野拓実選手の欧州での出場歴.....	47

第1章 背景

第1節 日本人選手の海外挑戦

第1項 日本人サッカー選手の欧州への挑戦

日本人サッカー選手の欧州への挑戦は 1977 年にブンデスリーガ(ドイツ 1 部リーグ)の 1.FC ケルンに加入した奥寺康彦氏に始まる。ウイングやサイドバックなど複数のポジションをこなし、堅実で献身的なプレーから「東洋のコンピューター」と呼ばれた同氏は、1 季目にブンデスリーガとドイツ・カップ (DFB ポカール) の 2 冠に輝いたほか、2 季目には欧州チャンピオンズカップ (現在の欧州チャンピオンズリーグ) で準決勝に出場し、ゴールも挙げている。ブンデスリーガ 2 部のヘルタ・ベルリン、ブンデスリーガのブレーメンと合わせ、計 3 クラブで 1986 年までドイツでプレーした。

しかし、日本サッカーの低迷もあって、その後しばらくは日本人選手が欧州のクラブへ渡ることができない時代があった。時は流れ、三浦知良選手がアジア人として初めてセリエ A (イタリア 1 部リーグ) へ挑戦したのが 1994 年である。ジェノアに加入した三浦選手のイタリア挑戦は、AC ミランとの開幕戦での負傷もあって 1 シーズンのみで 1 得点という不本意な形で終わったが、日本が初出場した 1998 年ワールドカップ (W杯) フランス大会後に中田英寿選手がセリエ A のペルージャへ移籍したのを機に、日本人選手の欧州挑戦の流れは本格化した。

W杯日本代表に選出された選手のうち海外のリーグに所属する選手は、大会を重ねるごとに増加傾向にある(表 1~表 7)。フランス大会は 1 人もいなかったが、2002 年日韓大会は中田英寿選手 (パルマ) ら 4 人、2006 年ドイツ大会は中村俊輔選手 (セルティック) 高原直泰選手 (ハンブルガーSV) ら 6 人、2010 年南アフリカ大会で長谷部誠選手 (ヴォルフスブルク) 本田圭佑選手 (CSKA モスクワ) ら 4 人と推移。2014 年ブラジル大会は 23 人中、香川真司選手 (マンチェスター・ユナイテッド) 内田篤人選手 (シャルケ) ら 12 人と一気に増えて初めて過半数を超え、2018 年ロシア大会は 2 得点と活躍した乾貴士選手 (ベティス) や、原口元気選手 (ハノーバー) ら 15 人、2022 年カタール大会は三笥薫選手 (ブライトン) 堂安律選手 (フライブルク) ら 19 人を占めた。1998 年大会は登録人数が 22 人、その後は 23 人となり、2022 年カタール大会は新型コロナウイルスの影響による規則変更があり、26 人まで登録が認められた。

日本代表における海外組の割合が増えていることから分かるように、日本選手の欧州進出は拡大している。近年、欧州におけるサッカーの日本人選手の存在感は増しており、欧州でもトップレベルとされるイングランド、スペイン、ドイツ、イタリア、フランスの五大リーグに限っても、在籍する日本人選手は 2023 年 12 月時点において 15 人に上る。

表 1 1998 年W杯フランス大会日本代表

背番号	氏名	所属クラブ
1	小島伸幸	ベルマーレ平塚
2	名良橋晃	鹿島アントラーズ
3	相馬直樹	鹿島アントラーズ
4	井原正巳	横浜マリノス
5	小村徳男	横浜マリノス
6	山口素弘	横浜フリューゲルス
7	伊東輝悦	清水エスパルス
8	中田英寿	ベルマーレ平塚
9	中山雅史	ジュビロ磐田
10	名波浩	ジュビロ磐田
11	小野伸二	浦和レッズ
12	呂比須ワグナー	ベルマーレ平塚
13	服部年宏	ジュビロ磐田
14	岡野雅行	浦和レッズ
15	森島寛晃	セレッソ大阪
16	斉藤俊秀	清水エスパルス
17	秋田豊	鹿島アントラーズ
18	城彰二	横浜マリノス
19	中西永輔	ジェフ市原
20	川口能活	横浜マリノス
21	檜崎正剛	横浜フリューゲルス
22	平野孝	名古屋グランパス

表 2 2002 年W杯日韓大会日本代表

背番号	氏名	所属クラブ
1	川口能活	ポーツマス(英2部)
2	秋田豊	鹿島アントラーズ
3	松田直樹	横浜F・マリノス
4	森岡隆三	清水エスパルス
5	稲本潤一	アーセナル(英)
6	服部年宏	ジュビロ磐田
7	中田英寿	パルマ(伊)
8	森島寛晃	セレッソ大阪
9	西澤明訓	セレッソ大阪
10	中山雅史	ジュビロ磐田
11	鈴木隆行	鹿島アントラーズ
12	檜崎正剛	名古屋グランパス
13	柳沢敦	鹿島アントラーズ
14	三都主アレサンドロ	清水エスパルス
15	福西崇史	ジュビロ磐田
16	中田浩二	鹿島アントラーズ
17	宮本恒靖	ガンバ大阪
18	小野伸二	フェイエノールト(蘭)
19	小笠原満男	鹿島アントラーズ
20	明神智和	柏レイソル
21	戸田和幸	清水エスパルス
22	市川大祐	清水エスパルス
23	曾ヶ端準	鹿島アントラーズ

表 3 2006年W杯ドイツ大会日本代表

背番号	氏名	所属クラブ
1	檜崎正剛	名古屋グランパス
2	茂庭照幸	FC東京
3	駒野友一	サンフレッチェ広島
4	遠藤保仁	ガンバ大阪
5	宮本恒靖	ガンバ大阪
6	中田浩二	バーゼル (スイス)
7	中田英寿	ポルトン (英)
8	小笠原満男	鹿島アントラーズ
9	高原直泰	ハンブルガーSV (独)
10	中村俊輔	セルティック (スコットランド)
11	巻誠一郎	ジェフ千葉
12	土肥洋一	FC東京
13	柳沢敦	鹿島アントラーズ
14	三都主アレサンドロ	浦和レッズ
15	福西崇史	ジュビロ磐田
16	大黒将志	グルノーブル (仏2部)
17	稲本潤一	ウェストブロミッチ (英2部)
18	小野伸二	浦和レッズ
19	坪井慶介	浦和レッズ
20	玉田圭司	名古屋グランパス
21	加地亮	ガンバ大阪
22	中澤佑二	横浜F・マリノス
23	川口能活	ジュビロ磐田

表 4 2010年W杯南アフリカ大会日本代表

背番号	氏名	所属クラブ
1	檜崎正剛	名古屋グランパス
2	阿部勇樹	浦和レッズ
3	駒野友一	ジュビロ磐田
4	田中マルクス闘莉王	名古屋グランパス
5	長友佑都	FC東京
6	内田篤人	鹿島アントラーズ
7	遠藤保仁	ガンバ大阪
8	松井大輔	グルノーブル (仏)
9	岡崎慎司	清水エスパルス
10	中村俊輔	横浜F・マリノス
11	玉田圭司	名古屋グランパス
12	矢野貴章	アルビレックス新潟
13	岩政大樹	鹿島アントラーズ
14	中村憲剛	川崎フロンターレ
15	今野泰幸	FC東京
16	大久保嘉人	ヴィッセル神戸
17	長谷部誠	ヴォルフスブルク (独)
18	本田圭佑	CSKAモスクワ (ロシア)
19	森本貴幸	カタールニア (伊)
20	稲本潤一	川崎フロンターレ
21	川島永嗣	川崎フロンターレ
22	中澤佑二	横浜F・マリノス
23	川口能活	ジュビロ磐田

表 5 2014年W杯ブラジル大会日本代表

背番号	氏名	所属クラブ
1	川島永嗣	スタンダード (仏)
2	内田篤人	シャルケ (独)
3	酒井高德	シュツットガルト (独)
4	本田圭佑	ACミラン (伊)
5	長友佑都	インテル・ミラノ (伊)
6	森重真人	FC東京
7	遠藤保仁	ガンバ大阪
8	清武弘嗣	ニュルンベルク (独)
9	岡崎慎司	マイイツ (独)
10	香川真司	マンチェスター・ユナイテッド (英)
11	柿谷曜一朗	セレッソ大阪
12	西川周作	浦和レッズ
13	大久保嘉人	川崎フロンターレ
14	青山敏弘	サンフレッチェ広島
15	今野泰幸	ガンバ大阪
16	山口蛍	セレッソ大阪
17	長谷部誠	ニュルンベルク (独)
18	大迫勇也	1860ミュンヘン (独2部)
19	伊野波雅彦	ジュビロ磐田
20	齋藤学	横浜F・マリノス
21	酒井宏樹	ハノーバー (独)
22	吉田麻也	サウサンプトン (英)
23	権田修一	FC東京

表 6 2018年W杯ロシア大会日本代表

背番号	氏名	所属クラブ
1	川島永嗣	メッス (仏)
2	植田直通	鹿島アントラーズ
3	昌子源	鹿島アントラーズ
4	本田圭佑	パチューカ (メキシコ)
5	長友佑都	ガラタサライ (トルコ)
6	遠藤航	浦和レッズ
7	柴崎岳	ヘタフェ (西)
8	原口元気	ハノーバー (独)
9	岡崎慎司	レスター (英)
10	香川真司	ドルトムント (独)
11	宇佐美貴史	デュッセルドルフ (独2部)
12	東口順昭	ガンバ大阪
13	武藤嘉紀	マイイツ (独)
14	乾貴士	ベティス (西)
15	大迫勇也	ブレーメン (独)
16	山口蛍	セレッソ大阪
17	長谷部誠	アイントラハト・フランクフルト (独)
18	大島僚太	川崎フロンターレ
19	酒井宏樹	マルセイユ (仏)
20	槇野智章	浦和レッズ
21	酒井高德	ハンブルガーSV (独)
22	吉田麻也	サウサンプトン (英)
23	中村航輔	柏レイソル

表 7 2022 年W杯カタール大会日本代表

背番号	氏名	所属クラブ
1	川島永嗣	ストラスブール (仏)
2	山根視来	川崎フロンターレ
3	谷口彰悟	川崎フロンターレ
4	板倉滉	ボルシアMG (独)
5	長友佑都	FC東京
6	遠藤航	シュツットガルト (独)
7	柴崎岳	レガネス (西2部)
8	堂安律	フライブルク (独)
9	三笥薫	ブライトン (英)
10	南野拓実	モナコ (仏)
11	久保建英	レアル・ソシエダード (西)
12	権田修一	清水エスパルス
13	守田英正	スポルティング (ポルトガル)
14	伊東純也	スタッド・ランス (仏)
15	鎌田大地	アイントラハト・フランクフルト (独)
16	富安健洋	アーセナル (英)
17	田中碧	デュッセルドルフ (独2部)
18	浅野拓磨	ポーフム (独)
19	酒井宏樹	浦和レッズ
20	町野修斗	湘南ベルマーレ
21	上田綺世	セルクル・ブリュージュ (ベルギー)
22	吉田麻也	シャルケ (独)
23	シュミット・ダニエル	シントトロイデン (ベルギー)
24	相馬勇紀	名古屋グランパス
25	前田大然	セルティック (スコットランド)
26	伊藤洋輝	シュツットガルト (独)

第2項 日本人選手のビッグクラブ挑戦

欧州でも評価を高め、欧州チャンピオンズリーグ (CL) で上位を狙うようなビッグクラブにステップアップして主力として活躍する日本人選手も少しずつではあるが、現れてきている。セリエ A のペルージャからローマへと移籍した中田英寿選手は決定的なラストパスやドリブル、さらに得点力を兼ね備えた MF として 2000/01 年シーズンにリーグ優勝に貢献し、日本サッカー史に大きな足跡を残した。2010 年夏にドルトムント (ドイツ) へ加入した香川真司選手は俊敏な動きを武器とする攻撃的 MF として屈強なドイツ人たちを手玉に取り、ブンデスリーガで 2 連覇を達成。2012 年夏には名将アレックス・ファーガソン監督が率いるイングランド・プレミアリーグの強豪マンチェスター・ユナイテッドへの移籍を実現させた。2010 年代には日本代表の中心として活躍した攻撃的 MF の本田圭佑選手が AC ミラン、サイドバックの長友佑都選手がインテル・ミラノと、ともに欧州 CL 優勝経験のあるセリエ A の名門クラブに在籍した。

本田圭佑選手は CSKA モスクワ (ロシア) 時代の 2009/10 年シーズンに欧州 CL でベスト 8 入りし、内田篤人選手は 2010/11 年シーズンにシャルケ (ドイツ) で欧州 CL のベス

ト 4 まで勝ち上がった。現在はガンバ大阪でプレーする宇佐美貴史選手はバイエルン・ミュンヘン（ドイツ）時代の 2011/12 年シーズンに欧州 CL でチェルシー（イングランド）との決勝でベンチ入りを果たしたものの、出場機会はなかった。最高峰の舞台の決勝のピッチに立った日本人選手は、まだいない。

近年では南野拓実選手（現モナコ）がリバプール（イングランド）でプレーしたが、世界中からトップ選手が集まる欧州のビッグクラブが狭き門であることに変わりはなく、2023 年 12 月現在では、日本人選手はイングランド・プレミアリーグのアーセナルに所属する富安健洋選手やリバプールに加入した遠藤航選手らに限られている。

第 2 節 世界の戦術的潮流

第 1 項 ポゼッションサッカー

ポゼッションサッカーは、2008 年ごろから 2015 年ごろにかけてのバルセロナ（スペイン）の最盛期に象徴されるパスサッカーで、2008 年欧州選手権、2010 年ワールドカップ（W 杯）、2012 年欧州選手権と、主要大会を「3 連覇」したスペイン代表にも通じる戦い方である。バルセロナ、スペイン代表で活躍したシャビ選手やイニエスタ選手といった名手たちによる「ティキタカ」と呼ばれる短いパスをつなぐ形が基本で、高いボール保持率と数多くのパスを成功させることで相手チームを押し込む。現代サッカーに連なる戦術の潮流の一つである。

代表的な監督はスペイン出身のグアルディオラ監督で、現在マンチェスター・シティーを率いてプレミアリーグを 2020/21 年シーズンから 3 連覇し、2022/23 年シーズンは欧州のクラブナンバーワンを決める最高峰の大会である欧州チャンピオンズリーグ（CL）も制した。2008 年～2012 年にはバルセロナの監督を務めており、その間にシャビ選手やイニエスタ選手、さらにアルゼンチン代表のスーパーstar、メッシ選手などを擁してリーグ優勝 3 度、欧州 CL 2 度優勝などの輝かしい実績を残している。

自分たちのチームがボールを保持し続けることは、裏を返せば相手に攻撃をさせないことにつながるとの考え方で、主導権を握ろうとし続けるサッカーである。また、パスを幾本もつなぎ続けることで守備に回る相手を走らせ、体力を消耗させる狙いもある。

ボール保持率は 60%を超えれば一般的に高いとされるが、ポゼッションサッカーのチームが一方向的に主導権を握れば、時には 70%を超える試合もある。

第2項 ハイプレスサッカー

現在のハイプレスサッカーは、ポゼッションサッカーへの対抗策として脚光を浴びた「ゲーゲンプレス」に代表されるものであり、ドイツ出身のラングニック氏が提唱して広まった。ゲーゲン(gegen)とはドイツ語で「対する」といった意味で、英語の against である。攻撃時に意図的に狭いエリアに選手を密集させる状況をつくり出し、ボールを失っても味方が近くにいることですぐに奪い返せるという考え方が前提にある。

ハイプレスサッカーの代表的な監督はドイツ出身のクロップ監督で、2023/24年シーズン現在はイングランド・プレミアリーグのリバプールを率いる。ドルトムントの監督を務めていた2010/11、2011/12年シーズンは香川真司選手らを擁してブンデスリーガ2連覇を達成。2015年から指揮するリバプールにおいても、2018/19年シーズンに欧州チャンピオンズリーグ(CL)を制し、2019/20年シーズンにはプレミアリーグで優勝した。

味方がボールを奪われた瞬間は、相手も攻撃に転じようとするのでチーム全体で前がかりになるシーンが多い。ゲーゲンプレスはその瞬間に再びボールを奪い返すことにより、相手の陣形が整っていないところを突くことでゴールに迫る確率が上がるという考え方である。ボールを奪ったら、素早く相手ゴールに向かうショートカウンターが基本で、攻守がめまぐるしく入れ替わるサッカーでもある。自陣で守備を固めて奪ってからカウンターを仕掛けるような少ない好機をうかがうサッカーとは一線を画し、ゲーゲンプレスは「積極的な守備」「攻撃的な守備」と捉えられている。

第3項 戦術的な融合

サッカージャーナリストの西部謙司氏は、現代サッカーについて「ポゼッションとハイプレスのセットは世界的に強いチームの証し」(2022年9月、コラム「スローフット Jのリーダー的存在」)と指摘している。ポゼッションかハイプレスかのどちらか一方の戦術だけというよりも、近年のサッカーはこの二つの戦術を状況に応じて優先度を判断しながら組み合わせ、あるいは使い分けながら、最適解を探して勝利を追求していると考えられる。これら二つの戦術を独立したものと捉えてしまうと、ボール保持自体が目的化してしまったり、相手の攻撃をつぶしたりするだけの魅力のないサッカーに陥る恐れがあり、どちらの戦術においても「ゴールを奪う」という目的がぶれてはいけない。

同氏はスペイン代表やバルセロナに代表されるポゼッション型に対して「別の潮流もあることを忘れてはいけない。ザルツブルクやライプツィヒのスポーツディレクターを務めたラングニック氏を発端とする、高強度のノンストップサッカーだ。スペイン式とは対極の考え方なのだが、プレミア勢については両者を融合させている。ボール保持と縦に速いサッカーのミックスだ」(2021年9月、コラム「スローフット 二つの潮流と融合」)と述べ、

プレミアリーグのクラブがポゼッションとハイプレスの二つの潮流を融合させて現代サッカーの最先端を走っているとの見解を示している。

第3節 本研究の問題意識

第1項 欧州クラブへの定着への課題

長澤(2019)は、これまで多くの日本人選手が欧州に挑戦してきたが、欧州に定着して複数シーズンプレーできた選手は必ずしも技術の高い選手ではないことに問題意識を持ち、大迫勇也選手や内田篤人選手らブンデスリーガで実績を残した選手にインタビュー調査を行った。その結果、欧州のリーグへ定着するには、単にサッカーの技術だけでなく監督の要求に柔軟に対応できる戦術的な理解力や順応する力が必要であることが示された。

一方、内田篤人選手が2020年8月の引退会見で「CL（欧州チャンピオンズリーグ）決勝とJリーグの試合を見ると、違う競技かなと思うぐらい差は広がったと思う。Jリーグのレベルが低いとは言わないが、違いはある」と語ったほか、大迫勇也選手や酒井高德選手ら欧州で長年プレーした選手から欧州のリーグとJリーグの違いについて指摘がされている。

筆者は2015年からドイツ・ベルリンを拠点とし、記者として欧州サッカーの報道に約7年間、携わった経験を持つ。内田選手の指摘は非常にうなずかされる思いであったと同時に、サッカーを伝える立場として「何」が「どう」違うのかということを知りやすく具体的に提示できる技量を持ち合わせていなかったとの反省があった。そのことから、スピードや迫力といった印象論で捉えるばかりでなく、Jリーグと欧州の最先端のサッカーの違いを明示し、日本選手が欧州でさらに活躍するために何が必要かを知りたいという思いが本研究の動機である。Jリーグと欧州の違いをあらかじめ具体的に認識することができれば、当然ながら選手自身が移籍した後も順応しやすくなる。

第2項 欧州ビッグクラブへの定着への課題

近年、欧州のリーグで日本人選手が増加し、欧州における日本人選手の評価も高まってきたが、ビッグクラブと呼ばれるクラブでプレーする選手は限られている状況である。実際に遠藤航選手は2022/23年シーズンまで所属していたシュツットガルトにおいてはチームの中心であったが、2023年夏に欧州チャンピオンズリーグ(CL)で優勝6度を誇る名門リバプールへ移籍した直後には出場機会を十分に得られず、チームへの順応に苦労した(表8表9)。シュツットガルトでは2020/21年、2021/22年シーズンと2季続けてブンデスリー

ガのデュエル王（1対1の競り合いの勝利数で最多）となって存在感を示したものの、同クラブは中堅クラブであり、リバプールのようなビッグクラブとは攻守の考え方に大きな差があったことがその理由と推察される。

表 8 遠藤選手のシーズンごとのリーグ戦戦績

シーズン	クラブ	試合	得点	出場時間	リーグ
23/24	リバプール	15	1	699'	プレミア
22/23	シュツットガルト	33	5	2925'	独1部
21/22	シュツットガルト	33	4	2902'	独1部
20/21	シュツットガルト	33	3	2957'	独1部
19/20	シュツットガルト	21	1	1801'	独2部
19/20	シントトロイデン	3	0	149'	ベルギー
18/19	シントトロイデン	17	2	1105'	ベルギー

Transfermarkt を基に筆者作成（2024 アジア杯前時点）

表 9 遠藤選手の試合出場状況 2023/24 シーズン (筆者作成)

日付	試合	スコア	対戦相手	出場
8月19日	プレミア	3—1	ボーンマス	▲63
8月27日	プレミア	2—1	ニューカッスル	▽58
9月3日	プレミア	3—0	アストンビル	▲87
9月16日	プレミア	3—1	ウルバーハンプトン	なし
9月21日	欧州リーグ	3—1	LASK	▽61
9月24日	プレミア	3—1	ウェストハム	▲88
9月27日	リーグ杯	3—1	レスター	◎フル
9月30日	プレミア	1—2	トットナム	▲73
10月5日	欧州リーグ	2—0	サンジロワーズ	▽45
10月8日	プレミア	2—2	ブライトン	なし
10月21日	プレミア	2—0	エバートン	なし
10月26日	欧州リーグ	5—1	トゥールーズ	◎フル
10月29日	プレミア	3—0	ノッティンガムF	▲80
11月1日	リーグ杯	2—1	ボーンマス	▽61
11月5日	プレミア	1—1	ルートン	なし
11月9日	欧州リーグ	2—3	トゥールーズ	▽45
11月12日	プレミア	3—0	ブレントフォード	◎フル
11月25日	プレミア	1—1	マンチェスターC	▲85
11月30日	欧州リーグ	4—0	LASK	◎フル
12月3日	プレミア	4—3	フラム	▲83
12月6日	プレミア	2—0	シェフィールドU	◎フル
12月9日	プレミア	2—1	クリスタルパレス	▽45
12月14日	欧州リーグ	1—2	サンジロワーズ	▽45
12月17日	プレミア	0—0	マンチェスターU	◎フル
12月20日	リーグ杯	5—1	ウェストハム	▽60
12月23日	プレミア	1—1	アーセナル	◎フル
12月26日	プレミア	2—0	バーンリー	◎フル
1月1日	プレミア	4—2	ニューカッスル	▽75

第3項 リサーチクエスチョン

本研究では、日本人選手が欧州の中堅クラブ、さらに欧州のビッグクラブでプレーする際にどのような違いに直面するのかをリサーチクエスチョンとした。一つめの問題意識として、日本人選手が欧州のリーグに移籍して定着する上で、Jリーグとの違いは何なのかという点である。次に、欧州のビッグクラブに移籍した際に、中堅クラブとの間に戦術面でどのような違いがあるのか、という点である。特に欧州のビッグクラブではポゼッションとハイプレスを試合の状況によって複雑に組み合わせ、技術だけでなく高度な戦術的理解が求められることが予想される。より多くの日本人選手が欧州へ移籍した際に、その成功確率を向上させるためにも、この二つの課題を明確にすることは意義のあることと考える。

第4節 先行研究

先行研究では、プレミアリーグへのステップアップに関して栗山(2013)が各国リーグのプレミアリーグへの輩出数から移籍ルートを調査した。また、戦術においては Fernández Navarro, FJ (2015)がプレミアリーグとスペインリーグを対象に攻撃的スタイルと守備的スタイルの分析を行った研究や、Gabriel Anzer et.al(2021)がブンデスリーガの得点パターンに関する分析を行った研究が見られた。また、鈴木ほか (2019) は、Jリーグはブンデスリーガに比べてDF-MF間のスペースを利用する割合が低いことを明らかにし「Jリーグはプレッシャーの少ないエリアを利用していると考えられる」と指摘した。Brîndescu, Sほか(2021)は、2020/21シーズンのプレミアリーグにおいて、高い位置でのプレスが好成績を収める一つの要素であることを明らかにした。同一リーグ内や二つのリーグ間を比較した研究は見られるものの、Jリーグ、欧州の中堅クラブ、欧州ビッグクラブという観点から、それぞれの戦術面の違いに焦点を当てた研究は見られなかった。

第5節 目的

本研究はポゼッションとハイプレスという現代サッカーの二大戦術の潮流の中で、Jリーグと欧州の中堅クラブ、さらに欧州のビッグクラブとの間にある戦術の違いを明らかにすることを目的とする。

第2章 方法

第1節 方法

本研究では、まずインタビューを通じて欧州と日本の戦術的な違いを定性的にまとめ、次に定量化可能な指標をインタビュー調査から抽出して欧州のビッグクラブとそれ以外のクラブとの間にある戦術的な違いを調査した。欧州のリーグは、各クラブの成績などを基にしている欧州サッカー連盟(UEFA)のランキングで最上位のプレミアリーグと、2023年12月時点で日本人の在籍人数が最も多いブンデスリーガを対象とした。

第1項 ビッグクラブの定義

ビッグクラブとは欧州チャンピオンズリーグ(CL)で優勝経験があるなどの歴史と伝統を持ち、なおかつ経営規模においても欧州のトップ10に入るようなクラブを指す。プレミアリーグではマンチェスター・シティー、リバプール、マンチェスター・ユナイテッド、チェルシー、トットナム、アーセナルがビッグ6と呼ばれ、人気や実力でトップクラスに位置づけられている。ドイツ・ブンデスリーガではバイエルン・ミュンヘン、ドルトムント、ライプツィヒが近年は強豪の地位を占めている。

表 10 UEFA のクラブランキング (成績に基づいた Pt) 2020/21 年のクラブ収入 (単位: 百万€)

1	マンチェスター C	(英)	141.000	1	マンチェスター C	(英)	731.0
2	バイエルン	(独)	136.000	2	R マドリード	(西)	713.8
3	R マドリード	(西)	123.000	3	リバプール	(英)	701.7
4	パリ S G	(仏)	108.000	4	マンチェスター U	(英)	688.6
5	リバプール	(英)	107.000	5	パリ S G	(仏)	654.2
6	インテル・ミラノ	(伊)	99.000	6	バイエルン	(独)	653.6
7	ライプツィヒ	(独)	96.000	7	バルセロナ	(西)	638.2
8	チェルシー	(英)	96.000	8	チェルシー	(英)	568.3
9	マンチェスター U	(英)	92.000	9	トットナム	(英)	523.0
10	ローマ	(伊)	91.000	10	アーセナル	(英)	433.5
11	ドルトムント	(独)	85.000	11	ユベントス	(伊)	400.6
12	バルセロナ	(西)	85.000	12	A マドリード	(西)	393.9
13	A マドリード	(西)	84.000	13	ドルトムント	(独)	356.9
14	セビリア	(西)	84.000	14	インテル・ミラノ	(伊)	308.4
15	ビリャレアル	(西)	80.000	15	ウェストハム	(英)	301.2

欧州サッカー連盟公式サイトより作成 [UEFA, 2024] 国際監査法人デロイト公式サイトより作成 [デロイト, 2024]

第 2 節 インタビュー調査

第 1 項 インタビュー調査の対象

(1) 酒井高德選手

1991 年生まれ、新潟県出身。J リーグのアルビレックス新潟の育成組織からトップ昇格。2011 年 1 月にブンデスリーガのシュツットガルトへ移籍した。サイドバックやボランチとしてプレーし、2015 年に移籍したハンブルガー SV では主将も任された。2012 ロンドン五輪 4 位。2010 年ワールドカップ (W杯) はサポートメンバーとしてチームに同行し、2014、2018 年の 2 大会の W杯日本代表。2019 年夏に J リーグに復帰。2023 年にはヴィッセル神戸の J 1 初優勝に貢献し、自身初の J リーグベストイレブンに輝いた。

表 11 酒井高德選手 経歴

シーズン	チーム	試合	出場時間	リーグ
2023	神戸	29	2599'	J
2022	神戸	34	3050'	J
2021	神戸	38	3420'	J
2020	神戸	32	2511'	J
2019	神戸	12	1068'	J
18/19	ハンブルガーSV	31	2554'	独2部
17/18	ハンブルガーSV	28	2289'	独
16/17	ハンブルガーSV	33	2692'	独
15/16	ハンブルガーSV	22	1889'	独
14/15	シュツットガルト	18	1441'	独
13/14	シュツットガルト	28	2330'	独
12/13	シュツットガルト	27	2404'	独
11/12	シュツットガルト	14	1260'	独
2011	新潟	25	2067'	J
2010	新潟	31	2535'	J
2009	新潟	18	772'	J

(Transfermarkt を基に筆者作成)

(2) 長澤和輝選手

1991年生まれ、千葉県出身。専修大から2014年に当時ブンデスリーガ2部の1.FCケルンに加入。翌シーズンはブンデスリーガでプレー。2015年12月に帰国。その後は浦和レッズで2017年にアジア・チャンピオンズリーグ(ACL)制覇に貢献し、日本代表デビューも果たした。ジェフ千葉や名古屋グランパスでもプレーし、2024年はベガルタ仙台所属。

表 12 長澤和輝選手の経歴

シーズン	チーム	試合	出場時間	リーグ
2023	仙 台	13	887'	J 2
2023	名 古 屋	10	184'	J 1
2022	名 古 屋	4	86'	J 1
2021	名 古 屋	32	1,416'	J 1
2020	浦 和	27	1,716'	J 1
2019	浦 和	30	1,962'	J 1
2018	浦 和	27	1,875'	J 1
2017	浦 和	8	445'	J 1
2016	千 葉	41	3,283'	J 2
15/16	1.FCケルン	1	45'	独 1 部
14/15	1.FCケルン	10	387'	独 1 部
13/14	1.FCケルン	10	671'	独 2 部

(Transfermarkt を基に筆者作成)

(3) ミヒャエル・スキッベ監督

1965 年生まれで、ドイツ出身。1998 年からブンデスリーガのドルトムントで監督を務め、2000 年から 2004 年まではドイツ代表コーチ。その後もレーバークーゼンやアイントラハト・フランクフルトを監督として率いた経験を持つ。2022 年に J 1 広島の監督に就任。1 季目はリーグ 3 位、YBC ルヴァンカップ優勝で J リーグの最優秀監督賞を受賞。2 季目もリーグ 3 位の成績を残した。

表 13 スキッベ監督の経歴

シーズン	クラブ・代表指導歴
2022～	広島監督
2020～2021	アルアインFC（サウジアラビア）監督
2019～2020	ドルトムント U-19（ドイツ）監督
2015	エスキシェヒルスポル（トルコ）監督
2015～2018～	ギリシャ代表 監督
2013～2015～	グラスホッパー（スイス）監督
2012	カラビュックスポル（トルコ）監督
2011	エスキシェヒルスポル（トルコ）監督
2011～2012	ヘルタ・ベルリン（ドイツ）監督
2009～2011	アイントラハト・フランクフルト（ドイツ）監督
2008～2009	ガラタサライ（トルコ）監督
2005～2008	レーパークーゼン（ドイツ）監督
2004～2005	ドイツ U-18/U-20代表 監督
2000～2004	ドイツ代表 コーチ
1998～2000	ドルトムント（ドイツ）監督

（サンフレッチェ広島 HP を基に筆者作成）

(4) 吉田健太氏

1996 年生まれ、埼玉県出身。ケルン体育大学で学び、ドイツ・サッカー連盟が組織する分析担当「チーム・ケルン」のメンバーとなった。2022 年ワールドカップ（W杯）カタール大会に向けてベルギーなどの国の分析を担当した。

(5) 大野嵩仁氏

1995 年生まれ、Jリーグの柏の育成組織出身。ケルン体育大学で学び、ドイツ・サッカー連盟が組織する分析担当「チーム・ケルン」のメンバーとなった。2022 年ワールドカップ（W杯）カタール大会に向け、日本の分析を担当した。

(6) 川田尚弘氏

ドイツ・サッカー連盟の A 級指導者ライセンス取得。ボルシアMGのユースでコーチを務めたほか、ハノーバーなどでもスカウトを務めた経験を持ち、ドイツ・サッカー関係者との親交が深い。仙台大准教授。

第2項 インタビュー調査内容

Jリーグと欧州のサッカーについて「日本と欧州のサッカーが“違う”との指摘についてどう思うか」「日本と欧州のサッカーのプレーで違いを感じる部分はどこか」などの質問を行い、得られた回答は逐語録にまとめ、コードを生成し、サブカテゴリーとカテゴリーの抽出を行い、欧州とJリーグの戦術的特徴をまとめた。

酒井高德選手はJリーグのヴィッセル神戸ー鹿島アントラーズ（2023年10月21日）の試合直後のインタビューであったため時間的な制約もあり、他の対象者と同じ分量の質問ができたわけではなかった。

第3項 研究倫理

インタビュー対象者には個人情報の保護、公表の方法について説明を行い、同意を得た上でインタビューを実施する。また、インタビューした内容を論文にする前に対象者の承認を取り、公表の範囲の合意を得ることとする。

第3節 日本と欧州クラブのボール奪取の違い

第1項 日本と欧州の「ボール奪取」に関する定量的把握

インタビュー調査からボール奪取の重要性が強調されたため、ボール奪取について定義を行い、定量的に分析を行った。

(1) 「積極的ボール奪取」の定義

攻守の切り替えに関連するプレーを12パターンに類型化し、その中で「①空中戦で競り勝って味方につなぐ」「②複数人で相手を囲んで奪う」「③連動した守備でミスを誘う」「④1対1の競り合いで奪う」「⑤パスカット、インターセプト、クリアで味方につなぐ」という五つのプレーを「積極的ボール奪取」と定義し、Jリーグと欧州のクラブにおけるボール奪取の違いを定量的に把握した。

表 14 攻守の切り替えに関するプレーの定義・分類

空中戦	① 競り勝って味方につなぐ ② 競り勝つも相手に渡る
連動	③ 複数で相手を囲んで奪う ④ 相手のミス誘う
奪取	⑤ 1対1の競り合いで奪う ⑥ パスカット、インターセプト、クリアで味方につなぐ ⑦ カットしながらも味方につなげず、相手ボールに ⑧ カットしてタッチ・CKへ逃げる
その他	⑨ GKキャッチ、またははじく・クリア
切り替え	⑩ 相手のクリア・ルーズボールがスペースに流れたところを拾う ⑪ 相手の反則ファウル ⑫ 相手がシュート枠外・パスミスなどでタッチライン外へ

攻守の切り替えの場面が、上記のうち①、③、④、⑤、⑥の五つの「積極的なボール奪取」によるものか、それ以外によるものかをカウントした。

(2) 「積極的ボール奪取」の分析方法

公開スタッツにこれらの具体的な項目はなく、Jリーグと欧州のリーグで統一された項目もないため、試合の映像から「積極的ボール奪取」が発生した場面を目視で記録した。分析の精度を高めるため、同じ試合の映像を複数の分析者が独立して分析し、その結果を比較して一貫性を確認し、相違がある場合は再評価を行った。

1 試合の全体を通じたボール奪取の状況の把握を行った。また、ピッチのどこでボール奪取したかを把握することでより戦術的な狙いが明確になることから、鈴木(2019)らのエリアの分類を参考に、ピッチをA1~A5の5つに分割した。鈴木(2019)の場合、相手ゴール側のペナルティーエリアをPAとして分割をしていたが、本研究ではA5に統合するものとした。

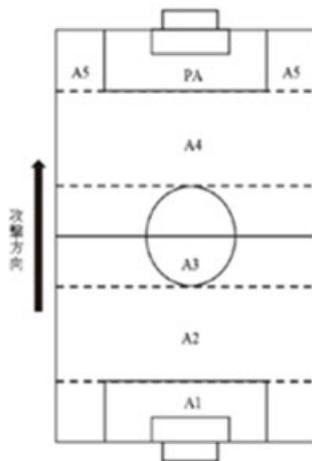


図 1 鈴木(2019)エリアの分割の仕方

(3) フルマッチの分析

対象の試合は、プレミアリーグ、ブンデスリーガ、Jリーグからそれぞれ1試合とし、一方的な試合展開になりにくい上位同士の対戦とするため、過去6シーズンの成績の平均で上位2チームを選択し、プレミアリーグはマンチェスター・シティー—リバプール(2023年11月25日)、ブンデスリーガはドルトムント—バイエルン・ミュンヘン(2023年11月5日)を対象とした。Jリーグに関しては2023年シーズンに優勝をしたヴィッセル神戸がタイトル獲得を決めた名古屋グランパス戦(2023年11月25日)を対象とした。それぞれの試合を通じての攻守の切り替えの回数をカウントし、その中で「積極ボール奪取」の回数及びエリアを調べた。プレミアリーグはSPOTV NOW、ブンデスリーガはスカパー!、JリーグはDAZNの試合映像を用いた。

(4) 得点パターンの分析

プレミア、ブンデス、Jリーグの強豪各3クラブの開幕から16試合(プレミアとブンデスは2023/24年シーズン、Jリーグは2023年シーズン)の得点場面について、映像内で確認できた「積極的ボール奪取」数を調べた。

次に得点パターンについて、A1~A5の五つのプレーエリアごとのボール奪取からの得点数の把握を行った。加えて、セットプレー、ポゼッション、ロングカウンター、ショートカウンターとそれ以外の得点パターンの把握を行った。Jリーグの得点パターンの分類 [Jリーグ/データスタジアム株式会社, 2023]をベースに、ロングカウンターはA1,A2における攻撃開始から20秒未満、ショートカウンターはA3~A5における攻撃開始から15秒未満、ポゼッションは攻撃開始から30秒以上経過した得点と定義し、各チームの得点を分類して比較した。

分析対象の試合は、プレミアリーグ、ブンデスリーガは 2023/24 年シーズンの開幕からブンデスリーガが冬季中断期間に入るまでの第 1 節から第 16 節までの得点場면을対象とした。J リーグは 2023 年シーズンの第 1 節から第 16 節までとし、試合数をそろえた。

比較対象とした強豪 3 クラブは、プレミアリーグは過去 6 シーズンの平均順位で最も上位のマンチェスター・シティーに加え、ビッグ 6 に数えられる強豪のうち日本人選手が所属しているアーセナルとリバプールとした。ブンデスリーガは過去 6 シーズンの平均順位の上位 3 チームであるバイエルン・ミュンヘン、ドルトムント、ライプツィヒとし、J リーグは 2023 年の 1~3 位であるヴィッセル神戸、横浜 F マリノス、サンフレッチェ広島を対象とした。試合分析と同じくプレミアリーグは SPOTV NOW、ブンデスリーガはスカパー！、J リーグは DAZN の映像を用いた。

第 4 節 欧州のビッグクラブと中位・下位クラブの戦術的違い

第 1 項 ボール奪取とタッチ数の調査

(1) 調査の対象

欧州のリーグでは統一された詳細なスタッツが存在するため、サッカーのデータサイト fbref.com で公開されているスタッツを用いて、上位の成績を取めている欧州ビッグクラブと、中位、下位のクラブとの比較を行った。同サイトのスタッツは、得点やボール保持率などだけでなく、ボールの移動距離や移動方向など詳細な数値が公表され、当該サイトを用いた研究例としては、プレミアリーグにおける相手ゴールに近い位置でのプレスの有効性を明らかにした Brindescu, S (2021)や、ロングボールを避け、ボール保持を重視するチームが好成績を取めていることを明らかにした Kapsalis (2023)があることから、採用した。中位、下位のクラブごとに比較し、ビッグクラブとそれ以外のクラブ間での戦術的な違いを検証した。

(2) ボール奪取に関連するスタッツ

ボール奪取に関連するスタッツとして fbref.com の「タックル」という指標を採用した。同サイトではエリアを「アタッキングサード」、「ミドルサード」、「ディフェンシブサード」の 3 つに区分されており、エリアごとにタックル数の把握を行った。データの対象は fbref.com が詳細データを公表している期間とし、プレミアリーグとブンデスリーガの 2017/18 年シーズンから 2022/23 シーズンまでの 6 シーズン分のデータとした。

プレミアリーグの上位を 1~3 位、中位を 4~17 位、下位を 18~20 位までとした。またブンデスリーガは、上位を 1~3 位、中位を 4~15 位、下位を 16~18 位とした。

まず、6シーズンの上位、中位、下位のタックル数についてエリアごとに割合を算出し、上位、中位、下位クラブのエリア別のタックル状況を把握した。次に、各シーズンにおける各クラブの順位と、エリア別のタックル数の把握を行い、エリア別のタックル数と順位の関係性の調査を行った。

(3) プログレッシブプレーに関連するスタッツ

インタビュー調査で抽出した「プログレッシブプレー（ゴールに向かうプレー）」を定量的に調査できるスタッツとして fbref.com の「タッチ数」を対象とした。タッチとは、パスやドリブルなど自分たちのチームがボールを保持しているときのプレーを一つずつカウントしたスタッツである。例えば、ワンタッチでパスをつないだ場合も 1 タッチ、ボールを受けた選手がドリブルで 3 回ボールに触れて再び味方にパスを出した場合も 1 タッチとなる。

2017/18 年シーズンからのプレミアリーグとブンデスリーガの 6 シーズンのデータからタッチのエリアごとの割合を算出し、ボール奪取と同じ方法で把握を行った。

第3章 結果

第1節 インタビュー調査

第1項 Jリーグの欧州の戦術的な違い

Jリーグと欧州の戦術的な違いの 카테고리として大きく「ボール奪取」と「プログレッシブプレー(ゴールへ向かうプレー)」の二つが抽出された。「ボール奪取」では、欧州とJリーグの比較の観点から「リトリートする(自陣に下がって守備陣形を整える)よりも前線からのプレス」「ボール奪取を目的とした素早い攻から守の切り替え」「ボール奪取への評価基準」の三つの項目がサブカテゴリーとして抽出された(表 1515)。特に長澤選手から、ブンデスリーガからJリーグに戻ってプレーした際に「敵が来ていないのにすごく早くボールを離していたときがあった。焦って早めにパスをつながなきゃというのがあったが、意外と(奪いに)こない。ギャップがあった」という発言があった。また、「プログレッシブプレー」では、「ボール奪取後の守から攻の切り替え」「リスクを負っても前進」「ボールの奪回を想定した戦術的ポジショニング」「パスの方向と優先度」というサブカテゴリーが抽出された(エラー! 参照元が見つかりません。7)。特に酒井高德選手から「取ったボールを『取りました。回そうぜ』というのがJリーグ」という発言が確認された。

(1) ボール奪取に関する発言

1) リトリートよりも前線からプレス

インタビューにおいてはJ1で優勝した神戸が、前線からのプレスを有効に活用できていたとの指摘が確認された。長澤和輝選手は「神戸はやっぱり前からいこうと、海外を経験した選手も多かったので、そういうふうに戦術的にやっていた。インテンシティー(プレー強度)の部分ですとか、守備の切り替え、前から取りに行くという部分(が特徴だった)」と相手ゴールに近いエリアでの守備の意識の高さを指摘。神戸でプレーする酒井高德選手も「攻守において前にというところをしっかりと意識させているつもりではある」と、前からの守備の大切さを口にしていた。

Jリーグと欧州の比較という観点では、吉田健太氏が「日本では抜かれないようにするというか、リトリート(自陣にいったん下がって守備陣形を整える)をよく教えられる。ただ、ドイツはボールを奪いに来るのがすごく強い。ボールを奪いに行かないで、日本的な守備をしようとする『なぜ行かない?』といわれる」とボール奪取への意識の違いがあると述べた。大野嵩仁氏も「(相手に)遅攻させるよりは、奪いに行くシーンは多い」と守り方の違いについて言及した。

2) ボール奪取を目的とした素早い攻から守への切り替え

J1のサンフレッチェ広島のスキップ監督は「ボールを失って、相手が100% (完全に) 支配している状況になる前に奪い返す」と、失った瞬間こそが奪い返すチャンスであると説いた。大野嵩仁氏はドイツで繰り返し広げられる、失った直後にさらにボールを奪い返す「ゲーゲンプレス」について「ゲーゲンとも言うが、ヤーゲンとも言う。(ドイツ語で) 狩るという意味。言葉的なニュアンスも影響しているのかなと思います。本当に、失った瞬間に狩りに行く感じ」と守備への切り替えの素早さと、その強度の高さを説明した。ドイツのサッカーに詳しい川田尚弘氏もライプツィヒの練習環境について「スタジアム(練習場)に、カウントダウンが始まるシステムを入れて、失って8秒以内にボール取る(といったメニューに取り組んでいる)」と、同クラブの選手たちが日常的に素早くボールを取り返す動きを体に染みこませていることを明らかにした。

長澤和輝選手はブンデスリーガからJリーグに移籍した際に「敵が来ていないのにすごく早くボールを離していたときがあった。焦って早めにパスをつながなきゃというのがあったが、意外と(奪いに)こない。ギャップがあった」と、プレスの感覚に大きな違いがあったことを肌で感じたことを明らかにした。

3) ボール奪取への評価基準

長澤和輝選手は「守備の部分での寄せとか、1対1の厳しさ。たとえばJリーグだったら、相手が後ろ向きでボールをキープしていたら、そんなにボールを取りにいかない。人に対して、そこまでつぶしにいかない。ドイツではもう1個寄せたり、もう1個足ごとつぶしにいたり、それが基準」と指摘。体を寄せて相手を自由にさせないことだけでなく、相手からボールを奪って初めて守備が成功するという基準でサッカーが繰り返し広げられていることを明らかにした。

大野嵩仁氏も「(ドイツで) ボールを奪うことへの評価はすごく高い。1対1で奪ったときの盛り上がり方はすごい」と、ボール奪取のプレーを見る周囲の目の違いにも言及した。

表 15 ポール奪取に関する発言録

ボール奪取	リトリートよりも前線からのプレス	スキッベ	攻撃をさせない。どンドン(プレスに)いって一番いい判断をさせない。そのためには前からプレスにいかないといけない。判断を鈍らせたり、正確なパスをさせない、ミス誘発させる部分をやっていくのが一番いいディフェンス。
		酒井高德	攻守において前にというところをしっかりと意識させているつもりではある。
		長澤和輝	神戸はやっぱ前からいこうと、海外経験した選手も多かったんで、そういうふうにな戦術的にやっていた。インテンシティーの部分ですとか、守備の切り替え、前から取りに行くという部分。
		吉田健太	日本でも抜かれられないようにするというか、リトリートをよく教えられる。ただ、ドイツは全部突っ込んでくるというか、ボールに対して奪いに来るのがすごい強い。ボールを奪いに行かないで、日本的な守備をしようすると、なぜ行かないんだ、といわれる。ボールにちゃんとアプローチしていくのはすごい求めるし、逆に言えば、抜かれられないような守備はあんまりできない。ドイツは展開が早いイメージがあると思うが、(日本は)リアクションでサッカーをしているのかなというような感覚はちょっと感じる。どっちかという受け身なサッカー。欧州のアグレッシブな感じに比べると。
	ボール奪取を目的とした素早い攻から守の切り替え	大野嵩仁	やっぱ相手との距離感ももっと狭くて、もっと確かにつながりくるんですけど、悪質な(タックル)というより、がつりくる。日本と比べたら、遅攻させるよりは、奪いに行くシーンは多い。サイドの1対1も。だからがつりかわされるシーンもあるし、でもやっぱボールを奪うこと、ゴールを守ることの評価が高い。 ゴールを取るためにボールを奪う。ゲーゲンプレスってやる位置も高いから、かわされてもそんなに影響ないというのもある。
		長澤和輝	(Jリーグでは)敵が来ていないのにすごく早くボールを離していたときがあった。焦って早めにパスをつながなきゃというのがあった。意外と(奪いに)こないんだと。ギャップがあった。逆に言うと、ドイツに最初に行ったときには、自分の中でこれキープできるだろうとか、相手を手で押さえていたら逆足の外側にボール置いていたらまず触れないのが普通だったが、そこを触りに来るし、触られちゃうんだというのが僕の中では最初驚きがあった。
	ボール奪取への評価基準	スキッベ	サッカーでボールを奪われたら、その瞬間が奪う確率が高い。そのやり方は正解だと思うし、似たやり方はクロップも正解。うちも同じような考え方はある。ボールを失って、相手が100%支配している状況になる前に奪い返す、それに関してはその通り。ボールを奪っただけで止まっちゃいけない。もう1回ボール奪われる状況が自分たちに降りかかってくる。
		吉田健太	攻から守の切り替えっていうところの意識はめちゃくちゃ強い。
		大野嵩仁	ゲーゲンともいうんですけど、ヤーゲンともいうんですね。(ドイツ語で)狩るという意味で。言葉的なニュアンスも影響しているのかなと思いますね。本当に失った瞬間に狩りに行く感じ。
		川田尚弘	スタジアム(練習場)に、ボール奪ったときにカウントダウンが始まるシステム入れて、失って8秒以内にボール取る。
ボール奪取への評価基準	長澤和輝	絶対的に一つはインテンシティー。攻守におけるハードワークが、たとえばJリーグで大迫とか武藤がハードワークしていたなと誰が見ても思うと思うんですけど、あの1.5倍くらいドイツではハードワークしていたんじゃないかなと思っていて。あとは守備の部分での寄せとか、1対1の厳しさ。たとえばJリーグだったら、後ろ向きでボールをキープしたらそんなにとりにいかないとか、人にそこまでつぶしにいかないなというのがあると思うんですけどドイツの時はもう1個寄せたり、もう1個あしごとつぶしにいたり、そういう安全なところがあんまりないくらい、みんなつぶしに行くという、それが基準。	
	大野嵩仁	ボールを奪うことへの評価はすごい高い。1対1で奪ったときの盛り上がり方はすごい。叫ぶ感じとか。富安選手もドイツ戦でやりましたけど。サネ止めた後の。相手との距離感に対する概念が、もっとかなり狭いというか。もしかしたら、ドイツ人のシュートレンジの広さが影響しているのか。シュートブロックに対する評価も超高い。	

(2) 遠藤選手への言及

Jリーグと欧州におけるプレーの違いとは別に、ブンデスリーガのシュツットガルトからプレミアリーグのリバプールに移籍した遠藤航選手への言及があった(表 16)。

スキッベ監督は「遠藤はもしかしたら名前が『ワタルではなく、ワルター(ドイツによくある名前)なのでは?』というようなくらい、ドイツ人なのではないかという感じ。ゲームを読む力がある。先を読んでプレーする、そこが強みだった」と、ブンデスリーガでデュエル王になった背景に洞察力の高さがあったと分析した。リバプールに加入直後は出場時間が短かったが、チーム内に負傷者が出たこともあって巡ってきたプレー機会を生かし、先発出場を続けるまでになった(2024年1月7日現在でリバプールの公式戦8試合連続先発)。長澤和輝選手は「航は、ブンデスにあって海外仕様になったと思うけど、スピード感がプレミアリーグはもう一つ上。ちょっといけていないと思っていたけど、練習で(プレミアリーグで得点王になったこともあるエジプト代表FW)サラ選手とかトップとやって、慣れてきたのかもあるのかもしれない」と、徐々にプレミアリーグにも順応できていると述べた。

表 16 遠藤航選手に関する発言

スキッベ	遠藤はもしかしたらドイツ人なんじゃないかなと思うくらい。ワタルではなく、ワルターなのでは?名前が。ゲームを読む力がある。先を読んでプレーする、そこが強みだったと思う。それゆえ一番いい数値(1対1の勝利数)を出せたのでは。
長澤和輝	航はブンデスに行って中心でやりながら、自分の仕事を完全に理解してつぶすところの選手へのタイミングなんかも海外仕様になったと思う。でも、スピード感がプレミアはもう一つ上なので、ちょっと(プレスに)いけていないと思っていたんですけど、練習でサラ選手とかとやって、慣れてきたのかもあるのかもしれない。
大野嵩仁	(遠藤)ヘディングとかもタイミングがうまい。セカンドボール、相手が蹴ってくるボールに対しての予測とポジショニング、駆け引き、跳ぶ前に(体を)ぶついたりとか。タイミングとかが他の選手より優れている。

(3) プロGRESSIVEプレーに関する発言

1) ボール奪取後の守から攻への切り替え

酒井高德選手は「取ったボールを、『取りました、回そうぜ』というのがJリーグ。縦に速いのが悪いみたいな風潮がちょっと日本にあるけど、(欧州のサッカーは) そうじゃない」とJリーグと欧州における攻撃へのスイッチの入り方の違いを指摘した。

長澤和輝選手も「要は5秒以内を取ってゴールに向かうというようなサッカー。カウンターにしてもドイツはめちゃくちゃ速い。Jリーグだとワンテンポ、カウンターの途中で横パスが入ったりする。(ヴィッセル神戸の) 大迫選手は『四の五の言わず縦に行け』と全員に言っていたと思うが、そのスピードと感覚を出したかったのだと思う」と、攻撃に切り替わってからのスピードアップについて違いがあると指摘した。広島のスキップ監督は「速くプレーすること。(ボールを) 奪ったらすぐその状況を打開するプレーにつなげないといけない。それをつなげるとゴールに結びつく」と奪った直後のプレー判断がゴールにつながるかどうかにおいて重要であると述べた。

守から攻への切り替えの局面でスピードが上がらないことで、試合のテンポに影響が出ると言及したのが吉田健太氏と大野嵩仁氏である。吉田氏は「Jリーグを見たときに、ゲームのスピード感がすごいゆっくりだなと感じた。これは、安全なところでボールを回る回数、確率が高いなというのがある」と述べ、大野氏も「Jリーグとドイツの試合を見ると、Jリーグはゆっくり見える。ボールが入れ替わった瞬間に、(ドイツは) 縦にと言うよりはゴールに行くスピードがやっぱり、すごくあると思う」と述べ、ドイツの試合のほうが展開が速いと指摘した。

2) リスクを負っても前進

攻撃に関しては「責任」「リスク」という言葉が聞かれた。

長澤和輝選手は「ブンデスの上位のほうのクラブは遅攻と速攻の両方を持っている。Jリーグは、しっかりこっちが守っていれば、そこまで崩されないだろうというのがある。駆け引きがちょっと面白くない。(Jリーグは) リアクションサッカー。(欧州は) リスクをとりながらアグレッシブに行く」と述べ、自ら仕掛けるプレーが多いのが欧州で、Jリーグは相手の出方をうかがって、それに対応することに重きが置かれていると分析した。スキップ監督は「責任逃れのパスをつないで後ろでキープするということよりも、どんどん前にいく。前にいくこと自体が責任だ」と、相手ゴールから遠い位置でのパス回しは「責任逃れ」という表現で、厳しく指摘した。

吉田健太氏はリスクの取り方の違いを指摘した。「もちろん攻撃であれば、ゴールを狙う、相手の守備陣の背後を狙うというプライオリティーがある。そこはたぶん(日独で) 変わらない。ただ、肌感覚だが、ドイツのほうが、チャレンジをしに行く。五分五分とか6-4(成

功確率が6割)とかあるないかで、日本だったら、7-3(成功確率が7割)の感覚だったら攻撃に行く。相手の背後にチャレンジするような回数は欧州の方が多い」と日本のサッカーのほうが、リスクを負わない傾向にあると分析。「相手の(守備の)ブロックの前側でボールを回している状況が多いから、これだと意味がない」と日本では相手ゴールに向かったり、相手守備を崩したりする攻撃が少ないと付け加えた。

3) ボール奪回を想定した戦術的ポジショニング

酒井高德選手は「中盤の蛍選手(山口)だったり、(FWの)大迫選手だったりとかが、すごく前から限定したりとか、インテンシティーを持って高い位置から守備にいける。それによって自分たちも後ろからラインアップして人に近くということは意識できている。チームコンセプトに沿って、プレーしているというのがすごく状態がいい要因」と述べ、前線から選手同士で連動して相手にプレスをかけられていることの手応えを口にした。

スキッベ監督は前線からの守備について「ドイツはグループ戦術のところまで落としていっている。1人が守備にいて、その後に1人がサポートするというような受け身なものではなく、そこに当たりにいて、次にすぐまた行けるようにという考え方が大事」と先手を取るような守備こそが大事だと述べた。

吉田健太氏も戦術的な部分について言及し「ボールを失うことを想定して、(あらかじめ)人を集中させておいてボールを放り込む。そういう戦術をやるのは、日本は少ない」と、狭いエリアを意図的につくって奪い返せるような状況の中でパスを放り込むラングニック式ともいえる攻撃が欧州では行われていると証言した。

4) パスの方向と優先度

酒井高德選手は「大迫選手が口酸っぱく、取ったボールはやっぱりに前にと(チームメートに)言っていた。前の選択肢を持つこと。海外のチームは取ったボールは常に前にいく」と述べ、欧州のサッカーにおいてはボールを持ったときの最優先事項は前進であるとの根本的な考え方を強調した。

欧州での指導歴が長いスキッベ監督も「中盤でボールを奪ったときにバックパスでいったんその状況を逃げてDF、GKまで下げる。これではゴールまで80メートルになってしまう。それはいい状況とはいえない」とボールを下げることは避けるべきだと指摘。さらに「相手ゴールまで40メートルくらいところで奪ったのであれば、そこからゴールに近づいていくプレーが一番理想的。何が大事かという、ボールを持ったとき一番いいのは前に行く。それが一番いい判断」とゴール方向にボールを運ぶことこそ、最も求められているプレーであると述べた。

吉田健太氏は「スペイン代表だったシャビ選手が昔よく言われたのは、『後ろにパスをしない』と。日本の選手はラインを1度越えても怖がっちゃってまた戻っちゃう。なかなか、この1stライン（相手の守備ラインの1列目＝主に相手FWのライン）、2ndライン（相手の守備ラインの2列目＝主に相手MFのライン）の辺りでせめぎ合いをしていて、この先にかかないみたいな。そうするとゲームの魅力は、なかなかゴール前にかかない」と、日本は欧州に比べて相手のDFラインを越えるようなパスが少ないと指摘した。

表 17 プロGRESSIVEプレーに関する発言録

プログレッシブ	ボール奪取後の守から攻の切り替え	スキッベ	速くプレーすること。それこそ、ラングニックがいているようなところ、奪ったらすぐその状況を打開するプレーにつなげないといけない。それをつなげるとゴールに結びつく。
		酒井高德	取ったボールを、「取りました、回そうぜ」というのがJリーグ。縦に速いのが悪いみたいな風潮がちょっと日本にあるけど、そうじゃない。
		長沢和輝	要は5秒以内に取ってゴールに向かうみたいなサッカー。カウンターにしてもドイツのカウンターはめちゃくちゃ速い。そのスピードでゴールにいかれたら、間に合わないが、Jリーグだとワントempo、横パスが入ったりする。それはいわゆる速攻だけど、そこまで速攻じゃないように、多分大迫選手は感じるのかもしれない。(大迫選手は)四の五の言わず縦に行けと全員に言っていたと思うんですけど、それはそのスピードと感覚を出したかったんだと思う。
		吉田健太	Jリーグの試合を見たときに、スピード感がすごいゆっくりだなと感じる。これは、安全なところでボールが回る回数、確率が高いなどというのが。最近ドイツもポゼッションを意識する、スペインの流れがあって、そっち寄りになりつつも縦へのサッカーになっている。
		大野嵩仁	Jリーグとドイツの試合を見ると、Jリーグはゆっくり見える。ボールが入れ替わった瞬間に、縦にと言うよりはゴールに行くスピードとかはやっぱり、すごいあると思う。
		川田尚弘	(スタジアムに、ボール奪ったときにカウントダウンが始まるシステム入れて)12秒以内にゴール。
	リスクを負っても前進	スキッベ	責任逃れのパスをつないで後ろでキープするというよりも、どんどん前に行くこと自体が責任。
		長澤和輝	遅攻と速攻を両方持っているのがブンデスの上のほうなのか。しっかりこっちが守っていたらそこまで崩されないだろうというのがJリーグ。お互いにちょっと後出しじゃんけんをするので、駆け引きがちょっと面白くない。リアクションサッカー。(欧州は)リスクをとりながらアグレッシブに行く。
		吉田健太	攻撃であれば、背後を狙おう、ゴールが狙えるならゴール行く。背後というプライオリティーがあるのはたぶん(Jリーグも欧州も)変わらないと思う。ただ、肌感覚なんですけど、やっぱりドイツのほうが、チャレンジをしいくというか、五分五分とか6-4とかあるないかで、日本だったら、完全に個人的な感覚ですけど、7-3で7が成功する感覚だったらいく。相手の背後にチャレンジするような回数は欧州の方が多い。(ドイツでは)自陣側に回すパスをすると、今のパスは何の意味があったの?という問いかけをすごいしていた。すごい相手の背後へ行くという意識がすごく強くて。日本でJリーグを見ていたり、自分のクラブを指導していても、ラインを超える回数がすごい少ない。相手のブロックの前側でボールを回している状況が多いから、これだと意味ないじゃんというか。別に勝っていたりしたら(リードしている状況であれば)いいと思うが。

プロGRESS	ボールの奪回を想定した戦術的ポジション	スキップ	ドイツはチームスピリット、グループ戦術のところまで落としていっている。1人が行って、1人がサポートするというバツシブ(受け身)なものではなくて、そこに当たりにいって、次にすぐまた行けるように、そういう考え方が大事。
		酒井高德	中盤の蛍(山口選手)だったり、サコ(大迫選手)だったり、すぐ前から限定したりとか、インテンシティーを持って高くいける。自分たちも後ろからラインアップして人に近くということは意識できている。チームコンセプトに沿って、プレーしているというのがすごく状態がいい要因。
		吉田健太	ドイツの場合は、あればクロップだったか、失うことを想定して、人を集中させておいて失う前提でボールを放り込むっていう。そういう戦術をやるのは日本は少ない。
		大野嵩仁	、(ボールを)保持していれば全体で上がれるから、失った時に選手の距離感が近くてすぐプレッシャー行けたり、失った時のカウンターのリスクが少なかったり、そういう感じだと思う、どこでどういうふうにもボールを保持しているかとゲーゲンプレス(をするか)の関係性。ゲーゲンプレスっていうのは、どこで、どう失ったかの基準に基づいての考え方だと僕は思う。
	パスの方向と優先度	スキップ	中盤でボールを奪ったときに、バックパスでいったんその状況を逃げてDF、GKまで下げる。ゴールまで80%くらいになってしまう。それはいい状況とはいえない。奪ったら、相手ゴールまで40%くらいにいるのであれば、そこからゴールに近づいていくプレーが一番理想的。何が大事かという、ボールを持ったとき一番いいのは前に行く。それが一番いい判断。それができない状況もある、そうなったら横。最終的に後ろ。後ろになったときには第3チョイスくらいになっているので、それはもういい選択肢とは言えない。自分たちがボールを持っているときにバックパスをする、これは一番まずい状況に追い込まれていることだと思う。
		酒井高德	サコ(大迫)が口酸っぱく、取ったボールはやっぱり前に前にと言ったり。前の選択肢を持つこと。海外のチームは取ったボールは常に前にいく。
		吉田健太	ドイツで僕が指導していたときにすごく強調されていたのは、相手のプレッシングラインを越えるパスをしろと。FWが来ていたら、こいつらの背中側に行けるパスをしろと。相手の背後にチャレンジするような回数は欧州の方が多いかなど。シャビなんか、昔よく言われたのは後ろにパスをしないと。極端に、だから1回ラインを越えても、日本の選手は怖がっちゃってまたもどっちゃう。なかなか、この1stライン、2ndラインのこの辺でせめぎ合いをしていて、この先にいかないみたいな。そうするとゲームの魅力は、なかなかゴール前にいかない。
		大野嵩仁	ドイツだったらもちろんゴールに向かえる選手、ゴールを奪える選手、ゴールをクリアできる選手がすごい評価が高い。日本だと確かに失わない選手の評価が高い。一番の優先度はゴール。ゴールに向かう。ゴールが空いているなら打つし、ゴールに向かうプレー。その迫力、テンポは求められる。

(4) 日本と欧州のサッカー観に関する発言

戦術的な部分の違いだけでなく、インタビューにおいては技術や考え方などにも日本と欧州では大きな違いがあるとの指摘がなされた(表 1818)。

1) 判断力と技術 (スキル)

スキップ監督は「フィールド上での判断が、少し足りないなと思っている」とプレー判断の面で選手の自主性がやや欠けていると指摘した。吉田健太氏は「相手からのプレッシャーがない中でのテクニックは、日本人はめちゃくちゃうまい。ただ、サッカーは相手のプレッシャーがある中でプレーしなきゃいけない。そうなったときにテクニックを発揮できない選手が多い」と指摘し、「(ドイツでプレーする選手は)プレッシャーがある中でボールを失わなかったりとか、その中でパスができたり、コントロールできたり、やっぱりうまいなと感じる」と実戦で有用なスキルの重要性を口にした。同様に川田尚弘氏も「技術の定義、オープンスキルとクローズスキル。欧州の選手は動きはぎこちないけど正確性が高い。日本だとフォーム、型を大事にする。そこが先行してしまうと(試合で相手から)プレッシャーが

来たときとか、動きながらとか、スペースがない中でミスが増えてしまう」と練習で磨く技術と、試合で使う技術に違いがあるとの考えを述べた。

2) 個と組織

吉田健太氏は「日本は人に迷惑をかけちゃいけないという教育が多い。だからチームに迷惑かけないように、ミスをしないようにしなきゃという思考回路になってしまうのかなと感じる」と、個よりも組織が優先される考え方の傾向について言及した。川田尚弘氏も教育面の影響の大きさを指摘し「クラスみんなに迷惑をかけない、親から言われたことはやらないといけない、というのを考えたときに、サッカーだけ自立して自分の考えを（ピッチで）主張して失敗を恐れずやりなさいと言っても無理」との見解を述べた。日本人と欧州人に思考の違いがあるということについては、ドイツ人のスキップ監督も「（ドイツは）各選手の自己主張が強くなりすぎている部分がある。（日本人の行動は）組織的に、全体が、という部分は強くあるのではないかと思っている。ドイツやそのほかの外国では、個人がというところが優先的にくる」と賛同した。

3) 日独の違い

Jリーグと欧州のサッカーは「違う競技」という指摘について、吉田健太氏は「サッカーの目的というところは一緒で、ゴールを取る、ゴールを守る。ルールも一緒という中で、プレースタイルや考え方、フィロソフィーはやっぱり、少し違いがある」と理解を示した。大野嵩仁氏も「確かに違う競技と言われたら、違う競技とも捉えられるシーンはいくつかあると感じている」と賛成した。その上で、大野氏は「文化的、教育的背景がある。日本は文化的に『過程』をもっと大事にする。その過程の一つとして、もしかしたらパスがあるだろうし、トラップがあるだろうし、ドリブルがある。そこに喜びを感じるポイント、僕たちが気持ちよくなれるポイントがある。彼ら（欧州の選手）はゴールを取ること、ゴールを守ることに喜びの軸が置いてある」と、ドイツ在住者として日々感じている違いを述べた。

4) ミスへの捉え方

大野嵩仁氏は「ドイツ人のミスに対する感じ方と、日本人のミスの捉え方が違うというのはちょっと大きい。これは教育の違いと考えられる。ミスに対して自分のせいじゃないと思えるのがある意味すごい。10のミスより1の成功に、（思考の）フォーカスがいく」と、

欧州でプレーする選手がミスに対してマイナスな感情を抱かずに、成功に向かってプレーしている姿勢を貫いていることを指摘。一方で「ぼくたちはやっぱり減点方式だから、教育も。何をしたらマイナスっていう。100でスタートしてマイナスしていく」と日本における教育の影響の大きさが、プレーの判断にも影響を与えているとの考えを述べた。吉田健太氏も「向こう（欧州）の選手は自分の非を認めない。（日本においては）ミスを恐れすぎている部分は間違いなくある。そこを恐れていたら絶対に上には行けない」と、海外でサッカー選手として成功するためには、ミスに対する考え方を日本的なものから改める必要があると指摘した。

来日して2シーズン、日本選手を指導したスキップ監督は「日本も変わってきている部分の方が強く見受けられる。自分たちがミスをするよりも、大事なのは相手にミスをさせる。そういう部分に変わってきていると感じている」と選手の変化を口にした。

表 18 日欧のサッカー観についての発言録

サッカー観	判断力と技術力(スキル)	スキップ	フィールド上での判断が、少し足りないなと思っている。
		吉田健太	プレッシャーがない中でのテクニックは日本人はめちゃくちゃうまい。ただ、相手のプレッシャーがある中でプレーしなきゃいけない。そうなったときにテクニックを発揮できない選手が多い。(ドイツは)プレッシャーがある中でボールを失わなかったりとか、その中でパスができた、コントロールでうまく置けたりとかというのは、やっぱりうまいなと感じる。
		川田尚弘	技術の定義、オープンスキルとクローズスキル。あっちの選手は動きはぎこちないけど正確性が高い。日本だとフォームを気にしたり、人がいない中でも型、モデルを大事にする。そこが先行してしまうと、プレッシャーが来たときとか、動きながらとか、スペースがない中でミスが増えてしまう。
	個と組織	スキップ	(ドイツは)各選手が自己主張が強くなりすぎている部分がある。(日本人の行動は)組織的に、全体が、という部分は強くあるんじゃないかと思っている。それに対して、ドイツや外国は、個人がというところが優先的にくるんじゃないか。
		吉田健太	日本は人に迷惑をかけちゃいけないという教育が多いじゃないですか。だからチームに迷惑かけてしまうから、ミスしないようにしなきゃという思考回路になってしまうのかな。
		川田尚弘	クラスみんなに迷惑をかけない、親からいわれたことはやらないといけない、こうしなさい、こうしなきゃいけないというのを考えたときに、サッカーだけ自立して自分の考えを主張して失敗を恐れずやりなさいと言っても無理。
	日独の違い(考え方)	スキップ	もちろん、そこに違いがあるのは間違いない。
		吉田健太	目的というところは一緒でゴールを取る、ゴールを守る、ルールも一緒という中で、プレースタイルだったり、考え方、フィロソフィーはやっぱり少し違いがあるかな。
		大野嵩仁	確かに違う競技と言われたら、違う競技とも捉えられるシーンはいくつかあると感じている。文化的、教育的背景が強い。 日本の文化的に「過程」をもっと大事にする。その過程の一つとして、もしかしたらパスがあるだろうし、トラップがあるだろうし、そのうちの一つとしてドリブル、過程の中では少し目立つけど、そこに喜びを感じるポイントというか、僕たちが気持ちよくなれるポイントがある。彼らはゴールを取ること、ゴールを守ることに喜びの軸が置いてある。 優先順位がゴールを取ること、ゴールを取られないことでスタートしてサッカーをするのと、スペースを意識してこうやって運んでいこうとかだけを意識してサッカーをするのは、競技性としては変わってくる。
	ミス	スキップ	日本も変わってきている部分の方が強く見受けられる。自分たちがミスすることよりも、大事なのは相手にミスさせる。そういう部分に変わってきていると感じている。
		吉田健太	向こうの選手は自分の非を認めない。(日本は)ミスを恐れすぎている部分は間違いなくある。そこを恐れていたなら絶対に上には行けない。
		大野嵩仁	ドイツ人のそのミスに対する感じ方と、日本人としてそのミスをしたときの、ミスの捉え方が違うというのはちょっと大きいか。これは教育の違いではないか。ミスに対して自分のせいじゃないと思えるのがある意味すごいということ。10のミスより1の成功に(意識の)フォーカスが行く。 僕たちはやっぱり減点方式だから、教育も。何をしたらマイナスっていう。100でスタートしてマイナスなので。彼らはどっちかという手を使って意見を言って、自分の意見を言う、正しいことを主張するというで生きていく世界。

第2節 試合の内容分析

第1項 ビッグクラブ同士の試合の分析

試合分析から、マンチェスター・シティー・リバプールと、ドルトムント・バイエルン・ミュンヘンでは「積極的ボール奪取」による攻守の切り替えが、神戸・名古屋に比べて高い割合で起こっていた。

マンチェスターCとリバプールの試合において、マンチェスターCの攻守の切り替えは123回確認でき、そのうち68回がパスカットや1対1の競り合いなどの「積極的なボール奪取」であった。その割合は55.28%に上った。リバプールは125回中、59回で47.20%、バイエルン・ミュンヘンは137回中、73回で53.28%、ドルトムントは131回中、68回の51.90%であった（表19）。

一方、神戸は174回の攻守の切り替えを確認し、「積極的なボール奪取」は57回、名古屋は165回のうち、57回で、それぞれ32.76%、34.55%であった。これは相手ボールをカットしてもマイボールにできずにすぐに再び相手に渡してしまったり、タッチラインなどに蹴り出したりするプレーの多さが数字に表れていると捉えられ、ボールを相手から取り切る力に差があることが示唆された。（ボールを奪いきれず再び相手ボールとなった回数はマンチェスターCが26回、リバプール31回、バイエルン23回、ドルトムント22回だった。一方で神戸54回、名古屋54回と、プレミア、ブンデスのチームの約2倍の割合で起こっていた。）

表19 積極的ボール奪取の割合

	対戦カード	積極的ボール奪取		
		攻守の切り替わり	%	ボール奪取ならず
英	マンチェスターC	68/123	55.28	26
	VS リバプール	59/125	47.20	31
独	ドルトムント	68/131	51.90	22
	VS バイエルン	73/137	53.28	23
日	神戸	57/174	32.76	54
	VS 名古屋	57/165	34.55	54

ボール奪取をエリアごとに見てみると、マンチェスター・シティーとドルトムントはA4のエリアでボール奪取（マンチェスター・シティーは23.69%、ドルトムントは25.20%）の割合が高く、相手陣内において攻守の切り替えを積極的に行っていた（表20表20）。リ

バプールは A5 での割合が 3.48%を記録したが、A4 では 6 チーム中最も低い 8.70%であった。一方で自陣のゴール前である A1 は 40.00%に上った。

ドルトムントバイエルンは、ボール保持率は 50%ずつであった。ドルトムントが A2～A4 のエリアで積極的にプレスを仕掛けて(A4 が 25.20%、A3 が 27.64%、A2 が 26.02%)、ある程度はボールを奪えていたことがデータからは読み取れるが、試合はバイエルンが効果的に得点を重ねて 4-0 という一方的なスコアであった。前半の早い時間帯で 2-0 とリードしたこともあり、バイエルンは相手ゴール位置に近いエリアでのリスクを負ったプレスを控えることが可能な展開であった。バイエルンは自陣の A2 でのボール奪取が 34.68%で最も多かった。

神戸は A5 でリバプールを上回る 3.70%の高い比率を示し、A4 においても 6 チーム中 3 番目の水準であった。相手ゴールに近い位置から積極的にプレスを仕掛けていたことがうかがえた。試合は 2-1 で名古屋に勝利した。

表 20 ボール奪取のエリアごとの割合

対戦カード	プレーエリア(%)				
	A5	A4	A3	A2	A1
マンチェスター C	1.75	23.69	19.30	29.83	25.44
VS リバプール	3.48	8.70	18.26	29.57	40.00
バイエルン	0.80	10.48	26.61	34.68	27.42
VS ドルトムント	0.81	25.20	27.64	26.02	20.33
神戸	3.70	14.20	22.22	32.10	27.78
VS 名古屋	0.65	10.39	22.73	38.90	27.27

第 2 項 得点パターンの分析

対象期間（英独は 2023/24 年シーズンの 1~16 節、日本は 2023 年の 1~16 節）における試合映像で攻撃の起点を確認できた得点パターンを分類して比較した(表 21)ところ、マンチェスター・シティーはショートカウンターとポゼッションからそれぞれ 10 点を挙げていた。ショートカウンターによるゴールが最も多かったのはライプツィヒの 15 点で、リバプールが 13 点で続いた。ロングカウンターで最多だったのはバイエルン・ミュンヘンで、8 点であった。

ヴィッセル神戸はショートカウンターで 11 点を挙げており、これはライプツィヒ、リバプールに次ぐ多さであった。

分析対象とした映像ではリバプールで2点、ドルトムントで1点、神戸は5点、横浜Mは12点、広島8点の起点が確認できなかったため、得点数及びその他の数値に含まなかった。

表 21 得点パターンの内訳

クラブ	得点	得点パターンの内訳					
		Sカウンター	Lカウンター	ポゼッション	セットプレー	その他	
英	マンC	38	10	1	10	7	10
	アーセナル	33	8	2	3	12	8
	リバプール	34	13	6	0	9	6
独	バイエルン	48	8	8	6	12	15
	ドルトムント	29	3	5	5	8	8
	ライプツィヒ	38	15	3	3	10	7
日	神戸	29	11	1	0	8	9
	横浜M	21	9	1	0	5	6
	広島	14	4	2	0	6	2

プレミア、ブンデス、Jリーグの各3チームの対象期間における得点の起点を調べたところ、2023年のJ1の1~16節におけるヴィッセル神戸の29ゴールのうち、12点(41.38%)が「積極的なボール奪取」からの得点であった(表22)。横浜Fマリノスは21点中、9得点(42.86%)、サンフレッチェ広島は14点中、5点(35.71%)だった。23/24年シーズンの1~16節においてバイエルンは49点中、20点(40.82%)が「積極的なボール奪取」からの得点で、ドルトムントは29得点中、13得点(44.83%)、ライプツィヒは38得点中、15点(39.47%)であった。

プレミアリーグにおいて「積極的なボール奪取」からの得点はマンチェスター・シティーが38ゴール中、17得点で、対象チームの中で最も高い44.74%を記録した。アーセナルは33ゴール中、10得点(30.30%)、リバプールは34点中、14点(41.18%)であった。

全ゴールにおける「積極的奪取からの得点」の割合はマンチェスター・シティーとバイエルンが高水準であったが、ヴィッセル神戸と横浜Fマリノスはリバプールやライプツィヒの割合を上回った。

また、積極的なボール奪取からの得点パターンをまとめて比較したところ、リバプールは14点中13点(ショートカウンター8点、ロングカウンター5点)、ヴィッセル神戸は12点中、11点(ショートカウンター10点、ロングカウンター1点)で、得点に繋がるプレーとして中盤から前のエリアでの積極的なボール奪取が効果的であることが示唆された。

一方マンチェスター・シティーは17点中、ショートカウンターが9点、ポゼッションが5点と、ハイプレスとポゼッションの双方からゴールを生み出していた。バイエルン・ミュンヘンとドルトムントの2チームはカウンターが多くはあったが、他のチームと異なり、ロングカウンターからのゴールがショートカウンターからの得点を上回った。

積極的なボール奪取は、試合分析で用いたプレー分類と同様に、五つのプレー（「空中戦で競り勝って味方につなぐ」「複数人で相手を囲んで奪う」「連動した守備でミスを誘う」「1対1の競り合いで奪う」「パスカット、インターセプト、クリアで味方につなぐ」）に該当するものとした。

表 22 積極的なボール奪取からの得点数と、得点分類

クラブ	得点	積極的奪取からの得点数	積極的奪取からの得点パターンの内訳						
			Sカウンター	Lカウンター	ポゼッション	セットプレー	その他		
英	マンC	38	17	44.74%	9	1	5	-	2
	アーセナル	33	10	30.30%	5	2	1	-	2
	リバプール	34	14	41.18%	8	5	0	-	1
独	バイエルン	49	20	40.82%	6	8	1	-	5
	ドルトムント	29	13	44.83%	3	5	2	-	3
	ライプツィヒ	38	15	39.47%	10	3	2	-	0
日	神戸	29	12	41.38%	10	1	0	-	1
	横浜M	21	9	42.86%	8	1	0	-	0
	広島	14	5	35.71%	3	2	0	-	0

「積極的なボール奪取」のプレー自体の内訳をクラブごとに分類した結果、マンチェスター・シティーは複数で相手を囲んでボールを奪う回数が7度と最も多かった(表 23)。Jリーグのサンフレッチェ広島が次いで5度を記録した。1対1の球際で強さを見せているのはハイプレスサッカーを標榜するラングニック氏の影響が濃いライプツィヒの5回であった。パスカット・インターセプトはバイエルン・ミュンヘンが15回で突出していた。

表 23 得点につながった積極的なボール奪取の内訳

	チーム	積極的奪取	空中戦	複数で囲む	連動してミス誘う	球際・1対1	パスカット
英	マンC	17	1	7		3	6
	アーセナル	9	3	1		2	3
	リバプール	14	2	1		3	8
独	バイエルン	20	1	2		2	15
	ドルトムント	13	1	3		4	5
	ライプツィヒ	15	1	1		5	8
日	神戸	12		2		3	7
	横浜M	9		2	1	2	4
	広島	5		5			

得点につながった「積極的なボール奪取」のエリアをクラブ別に比較(表 24)すると、マンチェスター・シティが相手ゴールに近い A5 および A4 のエリアで計 9 回を記録した。Jリーグのヴィッセル神戸も A4 でマンチェスター・シティと同じ 7 回をマークしており、相手陣内で果敢にボール奪取を成功させていた。アーセナルも 10 点のうち 8 点は A3~A5 のエリアでの積極的な奪取が起点で、リバプールも 14 点のうち 8 点が同エリアであった。プレミアリーグの 3 チームはいずれも相手ゴールに最も近い A5 でボールを奪うシーンがあったが、Jリーグの 3 チームは対象試合の中で当該のシーンはいずれも起こらなかった。

バイエルン・ミュンヘンは A4、A3 においても計 11 回の積極的なボール奪取を成功させている一方で、自陣である A2 でも 7 度のボール奪取からのゴールを記録した。A2、A1 からの得点は 9 に上り、これは対象の 9 チームの中で最多であった。

ドルトムントは 13 点のうち 8 点が A3、A4、ライプツィヒは 15 点のうち 11 点が A3~A5 のエリアでの積極的なボール奪取だった。

表 24 得点につながった積極的なボール奪取のエリア比較

	クラブ	積極的奪取	A5	A4	A3	A2	A1
英	マンC	17	2	7	6	2	
	アーセナル	10	1	4	3	1	1
	リバプール	14	1	5	3	1	4
独	バイエルン	20		4	7	7	2
	ドルトムント	13		3	5	4	1
	ライプツィヒ	15	1	5	5	1	3
日	神戸	12		7	4	1	
	横浜M	9		5	3	1	
	広島	5		2	1	1	1

第3節 試合スタッツの分析

第1項 エリア別のタックル数

エリア別のタックルではプレミアリーグとブンデスリーガの上位3クラブは、中位や下位と比較してアタッキングサードでのタックルの割合が特に高い結果となった(表 25)。上位、中位、下位は 2017/18 年シーズン以降の各シーズンの順位によるもので、上位は各シーズンの 1~3 位までの、延べ 18 チームの平均、下位はプレミアリーグであれば各シーズンの 18~20 位の延べ 18 チームの平均(ブンデスリーガは 16~18 位の延べ 18 チームの平均)、中位はそれ以外のチームの平均である。

一方で、下位チームほどディフェンシブサードでのタックルの比率が高かった。相手ゴールに近い位置でタックルを仕掛けられているチームは好成績を残し、逆に自分たちのゴールの近くでタックルが多くなると成績が下降する傾向が読み取れた。エリアは fbref.com の分類に沿って、ディフェンブサード (Dサード)、ミドルサード (Mサード)、アタッキングサード (Aサード) とした。それぞれ、ピッチを 3 等分し、自分たちのゴールに近いエリア、真ん中のエリア、相手ゴールに近いエリアを指す。

表 25 タックルのエリアごとの割合

	Dサード	Mサード	Aサード
プレミアリーグ			
上位 (1~3 位チーム)	42.29	41.36	16.35
中位 (4~17 位チーム)	50.17	38.47	11.36
下位 (18~20 位チーム)	51.41	38.12	10.47
ブンデスリーガ			
上位 (1~3 位チーム)	42.92	42.81	14.27
中位 (4 位~15 位)	47.41	41.41	11.19
下位 (16~18 位チーム)	51.41	39.17	9.42

プレミアリーグ、ブンデスリーガごとのクラブ別に以下に詳しく分類した(表 26)。過去 6 シーズンでタックル数の A サードにおける割合が最も高かったのは 2022/23 年のアーセナル (プレミア 2 位) の 20.77%であった。続いて、2020/21 年にブンデスリーガで優勝したバイエルンの 20.59%、2019/20 年にプレミアリーグを制したリバプールの 20.36%が続いた。いずれも各リーグで好成績を残しているクラブであった。D サードの割合が最も少ないのは 2020/21 年のバイエルンで 34.12%であった。リーグ全体の傾向と同じく、上位チー

ムは相手ゴールに近いエリアでより多くのタックルを仕掛け、自分たちのゴールに近いエリアでのタックルの割合は低い数値にとどまっていた。ブンデスリーガにおいては、Dサードのタックルの割合が高かった3チームはいずれも2部降格圏という成績であった。

表 26 英独クラブ別タックルのエリアごと割合の上位と下位チーム

	ディフェンシブサード			ミドルサード			アタッキングサード					
	シーズン	順位	クラブ	%	シーズン	順位	クラブ	%	シーズン	順位	クラブ	%
英	19/20	1	リバプール	35.45	20/21	4	チェルシー	46.08	22/23	2	アーセナル	20.77
	21/22	1	マンチェスターC	36.75	18/19	2	リバプール	45.68	19/20	1	リバプール	20.36
	20/21	3	リバプール	37.07	17/18	4	リバプール	44.74	21/22	1	マンチェスターC	20.28
	19/20	13	ニューカッスル	60.36	22/23	16	ノッティンガムF	30.50	17/18	15	ブライトン	5.68
	17/18	15	ブライトン	60.10	17/18	8	エバートン	31.99	19/20	13	ニューカッスル	6.80
	22/23	16	ノッティンガムF	57.66	19/20	13	ニューカッスル	32.84	18/19	7	ウルブズ	7.08
独	20/21	1	バイエルン	34.12	20/21	2	ライプツィヒ	49.78	20/21	1	バイエルン	20.59
	19/20	1	バイエルン	36.00	20/21	6	レーバークーゼン	47.60	19/20	1	バイエルン	19.60
	20/21	2	ライプツィヒ	36.30	17/18	8	Eフランクフルト	47.35	18/19	1	バイエルン	17.85
	18/19	18	ニュルンベルク	60.80	18/19	18	ニュルンベルク	31.76	17/18	18	ケルン	6.05
	19/20	18	バーダーボルン	56.01	22/23	10	ボルシアMG	34.41	18/19	18	ニュルンベルク	7.44
	17/18	16	ヴォルフスブルク	55.86	19/20	18	バーダーボルン	34.97	18/19	10	デュッセルドルフ	7.52

第2項 エリア別のタッチ数

プレミアとブンデスの上位3クラブはそれぞれの中位、下位と比較してアタッキングサードにおけるタッチ数の割合、1試合あたりのAサード、PA進入回数がいずれも上回った(表27)。上位、中位、下位は2017/18年シーズン以降の各シーズンの順位によるもので、上位は各シーズンの1~3位までの、延べ18チームの平均、下位はプレミアリーグであれば各シーズンの18~20位の延べ18チームの平均(ブンデスリーガは16~18位の延べ18チームの平均)、中位はそれ以外のチームの平均である。

プレミアリーグは中位や下位でもAサードの割合が23%台で、ブンデスリーガの上位の23.96%に近い数値を残していた。プレミアリーグ全体として、Aサードに入るシーンの割合が多いということの表れと捉えることができる。

表 27 タッチのエリアごとの割合と、アタッキングサードなどへの進入回数

リーグ	クラブ	タッチ数(%)			1試合平均の ゴール前進入回数	
		Dサード	Mサード	Aサード	Aサード	PA
英	上位	24.42	47.65	27.93	20.2	7.2
	中位	32.07	44.28	23.65	12.8	4.4
	下位	33.56	43.29	23.15	11.0	3.4
独	上位	27.82	48.22	23.96	16.3	6.1
	中位	33.34	45.42	21.24	11.5	3.9
	下位	35.46	44.38	20.16	10.1	3.2

プレミアリーグ、ブンデスリーガごとのクラブ別に以下に詳しく分類した(表 28)。アタッキングサードでのタッチが最も多かったのは 2021/22 にプレミアリーグを制したマンチェスター・シティーで 30.81%を記録した。続いて 2022/23 年にプレミア 2 位だったアーセナルで 30.71%、2019/20 年のマンチェスター・シティーが 30.25%で、ブンデスリーガのトップである 2020/21 年のバイエルン・ミュンヘンの 28.23%をいずれも上回った。ディフェンシブサードでのタッチ数が少ないトップ 3 はいずれもマンチェスター・シティーであった。クラブとして引いて守るのではなく、相手ゴールに近い位置でのプレーを志向していることが示唆された。

ディフェンシブサードでのプレーが最も多かった 2022/23 年のノッティンガム・フォレスト(40.93%)はプレミアリーグで 16 位、その次に割合が高かったのは 2022/23 年にブンデスリーガ 15 位だったアウクスブルクで 40.86%だった。いずれも降格は免れたもののリーグでは下位に甘んじた。

表 28 英独クラブ別タッチのエリアごと割合の上位と下位

	ディフェンシブサード			ミドルサード			アタッキングサード					
	シーズン	順位	チーム	%	シーズン	順位	チーム	%	シーズン	順位	チーム	%
英	18/19	1	マンチェスターC	18.77	18/19	2	リバプール	51.59	21/22	1	マンチェスターC	30.81
	17/18	1	マンチェスターC	20.56	20/21	1	マンチェスターC	51.58	22/23	2	アーセナル	30.71
	21/22	1	マンチェスターC	20.79	18/19	1	マンチェスターC	51.05	19/20	2	マンチェスターC	30.25
	22/23	16	ノッティンガムF	40.93	22/23	16	ノッティンガムF	38.36	18/19	19	フラム	19.80
	21/22	20	ノリッジ	40.30	22/23	9	プレントフォード	39.15	20/21	10	エバートン	19.87
	22/23	15	ポーンマス	39.64	22/23	15	ポーンマス	39.29	22/23	18	レスター	19.88
	18/19	1	バイエルン	23.26	17/18	4	ドルトムント	52.44	20/21	1	バイエルン	28.23
	17/18	1	バイエルン	23.78	18/19	2	ドルトムント	52.27	17/18	1	バイエルン	27.81
	17/18	4	ドルトムント	24.19	19/20	5	レーバークーゼン	51.93	18/19	3	ライプツィヒ	26.59
独	22/23	15	アウクスブルク	40.86	22/23	15	アウクスブルク	37.66	20/21	18	シャルケ	16.79
	20/21	15	ビーレフェルト	40.85	22/23	4	ウニオン	39.98	20/21	13	アウクスブルク	17.94
	19/20	18	パーダーボルン	39.71	22/23	17	シャルケ	40.19	20/21	17	ブレーメン	18.04

第4章 考察

第1節 欧州と日本の戦術的な違い

インタビュー調査からは、欧州では守備に対する根本的な考え方として積極的にボールを奪うプレーが重視されており、ボール奪取が成功した場合にはリスクを冒してでもゴールへ向かうプレーへとつなげることが特徴として挙げられる。その傾向に対してJリーグはボール奪取をしても必ずしもゴールに向かわず、ボールを失わないプレーを優先的に選択することを評価する傾向があると言える。

ドルトムントなどのクラブで指揮を執ったことのある経験豊富なスキッベ監督が、インタビューにおいて後方へのパスについて「責任逃れ」という表現をしたことは、欧州におけるサッカーという競技が選手に求めているものを端的に表している。ボールを持てば、リスクを取ってゴールに向かって仕掛けることこそが欧州でのサッカーという競技の本質であると理解することが必要である。

守備においても、同様である。相手ボールになった際、守り方の考えとしては大きく二つに大別される。一つは自陣に下がって陣形を整え、相手に不用意にスペースを与えない守り方であり、これを「リトリート」と呼ぶ。これに対して、前線からプレスをかけるハイプレスは積極的な守り方である。うまく機能すれば相手を自分たちのゴールに近づけないことにもなるが、ひとたびプレスをかわされれば、後方で守る人数は少なくなり、相手にスペースも広く与えてしまうというデメリットもある。その上で、酒井高德選手が「攻守において前にというところをしっかりと意識させているつもりではある」と語り、長澤和輝選手が「神戸はいくところはやっぱり前からいこうとしていた。海外を経験した選手も多いので、そういうふうに戦術的にやっていた。インテンシティーの部分や守備の切り替え、前から取りに行くという部分」と分析するように、2023年の神戸は欧州の基準をチーム内でうまく共有できたことでJ1初優勝という好結果に結びつけられたと考えられる。

戦術以外の部分でも、インタビューからは欧州と日本のサッカー観の違いを指摘する回答が相次いだ。サッカーはミスがつきもののスポーツである。その中で、ミスに対する欧州と日本のスタンスの違いは注目すべきであり、「(ドイツでは)10のミスより1の成功にフォーカスが行く」「ぼくたち(日本人)はやっぱり減点方式だから、教育も。何をしたらマイナスになるかという考えで、100でスタートしてマイナスになっていく」(いずれも大野嵩仁氏の発言)との指摘は、ピッチ上で現象として表れる欧州と日本のプレーの違いを理解するのに役立つと考える。

第2節 欧州ビッグクラブの戦術的特徴

プレミアリーグとブンデスリーガの上位クラブの特徴として、攻守両面において相手ゴールに近いエリア（アタッキングサード）でのプレーが多いことが特徴として挙げられる。プレミアリーグは上位3チームほど高い位置でのタックルの割合が高く、ブンデスリーガも上位3チームの同エリアでの割合が高かったことから、両リーグにおいては強豪チームほど相手ゴールに近い位置でのタックルすなわち前線からの積極的な守備が重視され、好成績に結びついていた。これはプレミアリーグにおけるプレスとチーム成績に関する Brindescu, S ほか (2021)の研究結果とも一致した。

インタビュー（[SYNCHRONOUS, 2023]）において、遠藤航選手がリバプールでの守備について「あえてリスクを冒して奪いにいくことで、周りも反応してボールを奪えている」と答えているように、相手陣内におけるボール奪取のトライは失敗すればカウンターを受けるリスクがあるが、そのリスクを冒してボールを奪い返す姿勢がビッグクラブでは求められている。パイプレスという戦術は相手ゴールに近い位置でプレスをかけるという「空間」的な圧力だけでなく、ボールを持った相手に十分な余裕を与えないという「時間」的な圧力という側面もある。

英国紙 Sunday Times の昨年12月の記事を引用しながら遠藤が「今までよりも5、6m高い位置でのプレー」への取り組みをしていることを紹介され、リバプール加入当初に比べ、出場時間が延びていることを伝えている（2024年1月6日、footallista「『5、6m高い位置で』泰然自若の30歳、遠藤航が“リバプールの6番”に進化を遂げるまで」）。ボール奪取という役割を担っている点はシュツットガルト時代もリバプール時代も共通しているが、プレーのエリアが前方にシフトしていることで、リバプールでの求められるプレーが表現できるようになったと理解できる。

また、攻撃においても欧州トップクラブは相手ゴールに近いエリアでのタッチ数が多いことから、相手ゴール付近でボール保持していることが読み取れる。実際にグアルディオラ監督が率いるマンチェスター・シティーはカウンターだけでなく、ポゼッションからの得点数も多かった。ビッグクラブはハイプレスとポゼッションを高い水準で使いこなしており、選手はどちらの戦術にも適応することが求められている。

両チームが対戦した2023年11月の試合はマンチェスターCがリバプールのプレスを巧みなビルドアップでかわしながら優位に試合を進めており、この試合におけるボール保持率は60%だった。マンチェスター・シティーがボールを保持して攻め込み、リバプールがそれに対抗するという構図の試合となったことで、リバプールは結果的にA3やA4といった比較的高い位置でのボール奪取の割合が低くなったと考えられる。

リバプールは2023/24年シーズンの1~16節を対象とした得点パターン分析では、14得点中8点をショートカウンターから挙げていたが、この試合では40.00%をA1（最も自陣のゴールに近いエリア）でボール奪取するなど、普段の戦いぶりとは様相の異なる展開を示

していた。それでも 1—1 の引き分けに持ち込む勝負強さを発揮しており、これもビッグクラブが兼ね備えている戦術的な柔軟性という一つの側面といえる。

第3節 ビッグクラブにおけるハイプレスサッカーの影響

現代のハイプレスサッカーはラングニック派と呼ばれるドイツを中心に広がった考え方である。ドルトムントで実績を積んだクロップ監督が現在はリバプールの指揮を執っており、マンチェスター・シティーのグアルディオラ監督も 2013/14 年から 3 シーズンはバイエルン・ミュンヘンの監督を務めて、ドイツ・サッカーに触れている。ライプツィヒなどのラングニック直系のクラブだけでなく、欧州上位クラブの戦術にはドイツの影響が反映されていると考えられる。

グアルディオラ監督はバイエルン時代の 2015 年 11 月に欧州チャンピオンズリーグ(CL) のアーセナル戦後の記者会見で「ボール保持率が大事でないという人もいるが、私にとっては最も重要。100 パーセントが理想だ」と語っている。これは究極的な野心であるが、単にボールをつなぎ続けるだけでなく、相手からボールをいかに早く奪うかという視点が極めて重要である。

2023 年 12 月 3 日のプレミアリーグ、マンチェスター・シティー—トットナムの一戦では、後半 36 分に相手ボールを連動したプレスで奪うマンチェスター・シティーの象徴的なシーンがあった。相手陣内(A4)のエリアでボールをコントロールしようとしたトットナムの選手に対して 3 人が囲いこむようにプレスをかけて奪取。そこからすかさずハーランド選手にパスを通し、最後はグリーンリッシュ選手が決めた。トットナムの守備ラインがハイボールをクリアしてから約 6.9 秒でボールを奪い返し、そこからシュートまで約 4.9 秒という早業であった。ボール保持を重視するグアルディオラ監督であるが、いかに相手から素早くボールを取り返すチームをつくり上げているかを示すシーンであった。

一方でマンチェスター・シティーはプレミア、ブンデス、Jリーグの計 9 チームの得点パターン分析において最多の 10 ゴールをポゼッション（攻撃開始から 30 秒以上）の形で奪っている。中でも 2023 年 9 月 23 日のノッティンガム・フォレスト戦の前半 7 分のゴールは、ボール奪取から約 135 秒もボールを保持し続けてからゴールを奪っていた。チーム全体のパスをつなぐ技術、連係、判断力が伴わなければ、これだけの長い時間を相手にボールを触らせずにつなぎ続けることは難しいだろう。このことから、欧州の最先端を走るビッグクラブにおいてはポゼッションとハイプレスを、いつ、どう使い分けるかという戦術的な意思統一が高いレベルでなされていると考えられる。この点についてはリーグ内におけるクラブ間の格差の影響も考えられる。実力差の大きなチームによる対戦では上位クラブはポゼッションの傾向が強まり、拮抗していれば積極的ボール奪取を含む攻守の入れ替わりの頻度も多くなると考えられる。

また、今回の研究対象はリーグ戦の試合となっており、各チームが持っている実力が結果に反映されやすいフォーマット（形式）における戦術の傾向であるという点に留意する必要がある。一発勝負のカップ戦では、自陣で守りを固めた上でロングボールやセットプレーで少ない好機を生かすという戦い方で弱者が強者を倒す「ジャイアントキリング」が起こって伏兵が勝ち上がることもあり、それもまたサッカーの持つ面白さ、難しさといえる。

第4節 日本選手の環境

欧州内の中堅からビッグクラブへと移籍した例を考えると、南野拓実選手はリバプールへ移籍する前にラングニック氏がスポーツディレクターを務めていたザルツブルク（オーストリア）に所属した。素早いボール奪取とそこからのカウンターという戦い方を採用するクラブで、 Klopp 監督率いるリバプールにも通じるものがあり、移籍は高い適応力があるとの期待の表れであったとも考えられる。

プレミアリーグでは十分な出場機会をつかめず、2022/23年にフランス1部リーグのモナコへ移籍したが、2季目である今季は出場時間も得点も順調に伸ばしている(表29)。ザルツブルク時代にも恩師だったヒュッター監督がモナコの監督に就任したことで、再び輝きを取り戻しつつある。リスクを恐れずに仕掛けるプレーが武器となっており「奪われれば即カウンターというリスクの高いプレーに挑むことについて南野は『状況が把握できていないと（そういうプレーは）難しいところもある。でも、そこで勇気を持ってターンできる選手がいると攻撃に繋がるし、そのターンだけで展開が変わるシチュエーションというのはけっこう多い。そういうプレーを増やしていければ』と言い切る」(2024年1月15日、footballista「南野拓実、完全復活の舞台裏。モナコで常に意識してきた『それだけで展開が変わる』ターンとポジショニング」と、パスを受けても安全な位置にいる味方につなぐのではなく、ターンしてゴール方向に仕掛けることの重要性を南野自身が強調している。

表 29 南野拓実選手の欧州での出場歴

シーズン	クラブ	試合	得点	出場期間	リーグ
23/24	モナコ	16	5	1102'	仏1部
22/23	モナコ	18	1	724'	仏1部
21/22	リバプール	11	3	176'	プレミア
20/21	サウサンプトン	10	2	717'	プレミア
20/21	リバプール	9	1	286'	プレミア
19/20	リバプール	10	-	242'	プレミア
19/20	ザルツブルク	14	5	908'	オーストリア
18/19	ザルツブルク	27	6	1744'	オーストリア
17/18	ザルツブルク	28	7	1680'	オーストリア
16/17	ザルツブルク	21	11	1140'	オーストリア
15/16	ザルツブルク	32	10	2010'	オーストリア
14/15	ザルツブルク	14	3	798'	オーストリア

Transfermarkt を基に筆者作成(2024.1 アジア杯前時点)

ブンデスリーガのシュツットガルトやハンブルガー S V でプレーした経験のある酒井高徳選手は、2019 年にヴィッセル神戸へ移籍して J リーグへ復帰した。当初は欧州でプレーしていた頃との感覚とのズレを感じていた（2021 年 11 月 9 日、Number 「酒井高徳 30 歳が問いかける J リーグと欧州サッカーの“決定的な差”」）が、徐々にチーム内に欧州基準の「指標」ができていく点に言及している。「攻撃に関していえばサコ（大迫勇也選手）が口酸っぱく、取ったボールは前に前にと言っている。前の選択肢を持つこと。海外のチームは取ったボールは常に前にいく」と述べ、「取ったボールはやっぱり前に前に。前の選択肢を持つこと。縦に速いのが悪いみたいな風潮がちょっと日本にあるけど、そうじゃなくて。取ったボールを、『取りました、回そうぜ』というのが J リーグ。海外のチームは取ったボールは常に前にいく」と、攻守が切り替わった場面でのプレーの優先度の違いを指摘。攻守においてゴール方向に向かうプレーの必要性を説いた。2023 年の神戸は大迫勇也選手のポストプレーを生かした推進力の高さと前線からの強度の強い守りで、見事にリーグ初制覇を達成した。

第 5 節 日本におけるブラジルの影響

本研究は現代サッカーにおける J リーグと欧州の違いを探索したものであるが、日本サッカーの歴史を考えると、ブラジルから受けた影響の大きさも忘れてはならない。J リーグ開幕以前から、セルジオ越後、ネルソン吉村、与那城ジョージ、セイハン比嘉といった日

系選手が日本リーグで活躍。日本サッカー殿堂入りしているジャーナリスト賀川浩氏は、1960年後半～70年代にかけて「日本サッカーへのメディアの関心は薄く、試合のスタジアムは閑散とした時期だったが、フジタの成功によってサッカー関係者のブラジル指向はさらに強くなっていった」（賀川サッカーライブラリー「セルジオ越後とフジタ」ほか）とセルジオ越後を筆頭としたブラジル出身の日系選手や、ブラジル代表としてワールドカップ（W杯）3位になったこともある大物選手、オスカー（日産自動車＝現横浜Fマリノス）がもたらしたインパクトの大きさを記している。

そして、Jリーグ開幕以降も人気沸騰の立役者の一人である元ブラジル代表の「神様」ジーコ（鹿島アントラーズ）をはじめとするブラジル選手の功績は極めて大きなものである。1994年ワールドカップ（W杯）優勝メンバーであるダウンガ（ジュビロ磐田）やジョルジーニョ、レオナルド（鹿島アントラーズ）らそうそうたる顔ぶれが日本にやってきて、お手本を示し続けてくれた。

JリーグMVPに輝いた選手はジョルジーニョ、ダウンガら10選手＝日本国籍を取得した三都主アレサンドロ（清水エスパルス）、田中マルクス闘莉王（浦和レッズ）を含む＝に上り、出身国別では日本に次いで2位。得点王はエメルソン（浦和レッズ）やジュニーニョ（川崎フロンターレ）ら14人で、国別では最多である。また、Jリーグの最優秀監督には、唯一のリーグ3連覇を達成したオリベイラ監督（鹿島アントラーズ）や、ネルシーニョ監督（柏レイソル）ら4氏（延べ6度）が輝いており、こちらも日本出身以外ではブラジルが最多である。圧倒的に高い技術力でパスをつなぐブラジルのサッカーのエッセンスがJリーグにもたらした影響は、ブラジル出身の選手や監督が残した大きな功績からもうかがえる。

2024年のJ1は、20クラブのうちブラジル人監督が1人もいないという状況となっている。昨年J1得点王を大迫勇也選手と分け合ったアンデルソンロベス選手（横浜Fマリノス）をはじめとするブラジル出身選手は、依然としてJリーグで大きな存在感を示しているが、ブラジル人監督不在という点からは戦術的なトレンドとしてJリーグが欧州的な方向を向いている時期にあると考えられる。

第6節 Jリーグの夏場のプレー環境とシーズン移行

Jリーグのプレー環境を考えたとき、6～8月の高温多湿の中で試合が行われていることは留意すべきである。欧州五大リーグが8月に開幕して、翌年5月までシーズンを行うのに対し、Jリーグは2月下旬に開幕して12月上旬までリーグ戦を実施する日程である。欧州は6、7月にリーグ戦が行われない（中堅リーグの中にはベルギーのように7月に開幕するリーグもある）が、日本では梅雨～猛暑の時期に当たる時期にもリーグ戦が組み込まれている。

Jリーグも、プレーの水準・魅力の観点から夏場の試合について、シーズン移行に関する議論の中で、大きな課題であると指摘。「現在のシーズンは暑い中での試合が多く、『インテンシティーの連続性がある魅力的なフットボールで国際競争力を高めること』を阻害している可能性。暑い中での試合を減らすことで『世界と戦うフットボール』を追求していきたい」と公表している。

Jリーグがピッチ上のプレーの差異の例として提示したデータのうち、以下に走行距離とハイインテンシティー走行距離の二つを示した(エラー! 参照元が見つかりません。(エラー! 参照元が見つかりません。))

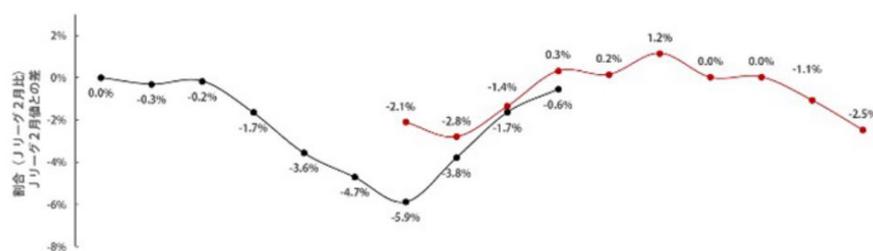
Jリーグは2022年、五大リーグは2021/22年シーズンの平均値で、総走行距離は1試合におけるフィールド選手(GK以外)の1人当たりの平均走行距離で、Jリーグによると、対象は各試合で60分以上プレーした選手となっている。ハイインテンシティー走行距離は時速20キロ以上で走った平均走行距離で、対象は総走行距離と同様である。

二つのグラフともJリーグは開幕後から夏場にかけて下降線をたどり、終盤戦に持ち直すという「谷型」の曲線を描いているのに対し、欧州五大リーグは開幕後に上昇する「山型」の曲線を描いている。Jリーグではシーズンの佳境の時期に、総走行距離やハイインテンシティーの走行距離が大きく減っている現状であり、これでは強度の高い攻防を期待するほうが酷ということもできる。

《比較1》走行距離

1人あたりの総走行距離 (km)

月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5
J1リーグ	10.16	10.13	10.14	9.99	9.80	9.68	9.56	9.77	9.99	10.10						
欧州リーグ							9.94	9.87	10.02	10.19	10.17	10.28	10.16	10.16	10.05	9.91



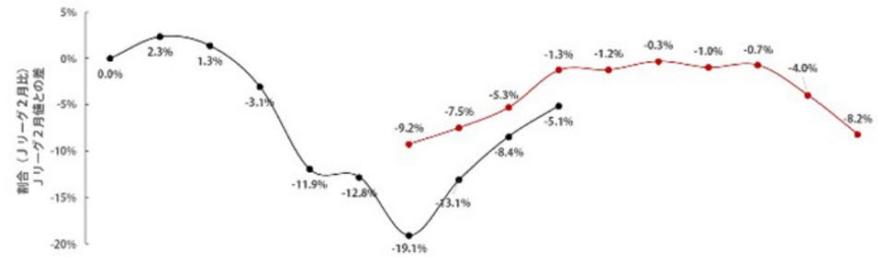
※欧州リーグ：2021-22シーズンのデータで、5大リーグの平均値。J1リーグ：2022シーズンのデータ。
 ※総走行距離：1試合におけるフィールドプレーヤー1名当たりの平均走行距離。対象は各試合において60分以上出場している選手。
 ※J1リーグのデータは公式データではなく、欧州リーグと同様に外部データの定義で合わせている。

図2 総走行距離のJリーグと欧州五大リーグ平均比較(出典：Jリーグ公式サイト)

《比較2》ハイインテンシティ走行距離

ハイインテンシティ走行距離 (km)

月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5
J1リーグ	0.74	0.76	0.75	0.72	0.65	0.64	0.60	0.64	0.68	0.70						
欧州リーグ							0.67	0.68	0.70	0.73	0.73	0.74	0.73	0.73	0.71	0.68



*欧州リーグ：2021-22シーズンのデータで、5大リーグの平均値。J1リーグ：2022シーズンのデータ。
 **ハイインテンシティ走行距離：1試合におけるフィールドプレーヤー1名当たりのハイインテンシティ（20km/h以上）での平均走行距離。対象は各試合において60分以上出場している選手。
 **J1リーグのデータは公式データではなく、欧州リーグと同様に外部データの定義で合わせている。

図3 ハイインテンシティー走行距離のJリーグと五大リーグ比較(出典：Jリーグ公式サイト)

これは、Jリーグが指摘しているように、シーズン制の影響が大きいと考えられる。実際に最も暑い時期の東京の平均気温は、英国のロンドンに比べて約8度、ドイツのベルリンに比べても約6度も高い。1年で最も暑い時期にリーグ戦を行っていない欧州に対し、日本は試合を実施しているという環境面の大きな違いがある。

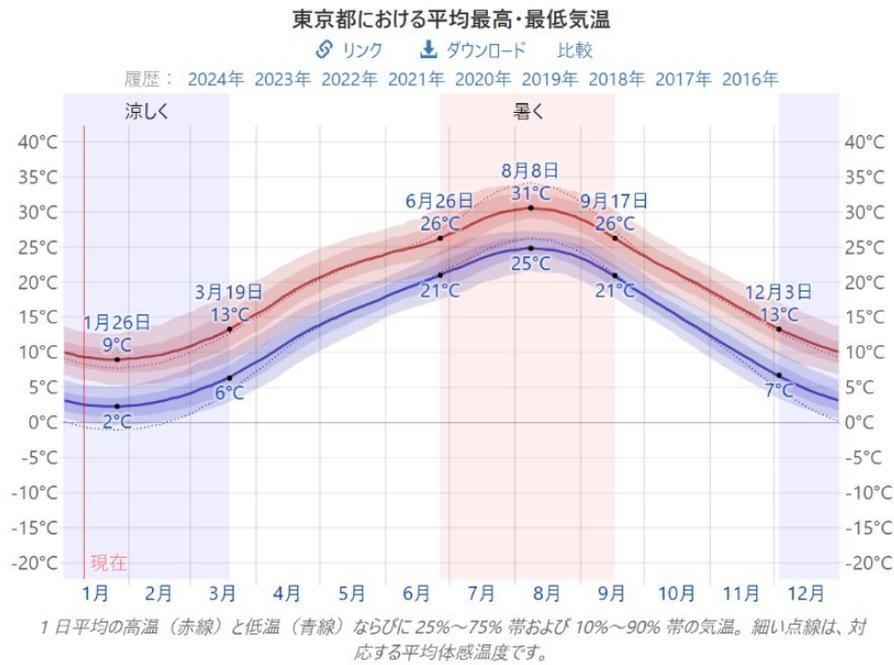


図 4 東京の年間平均気温(出典：Weather Spark)

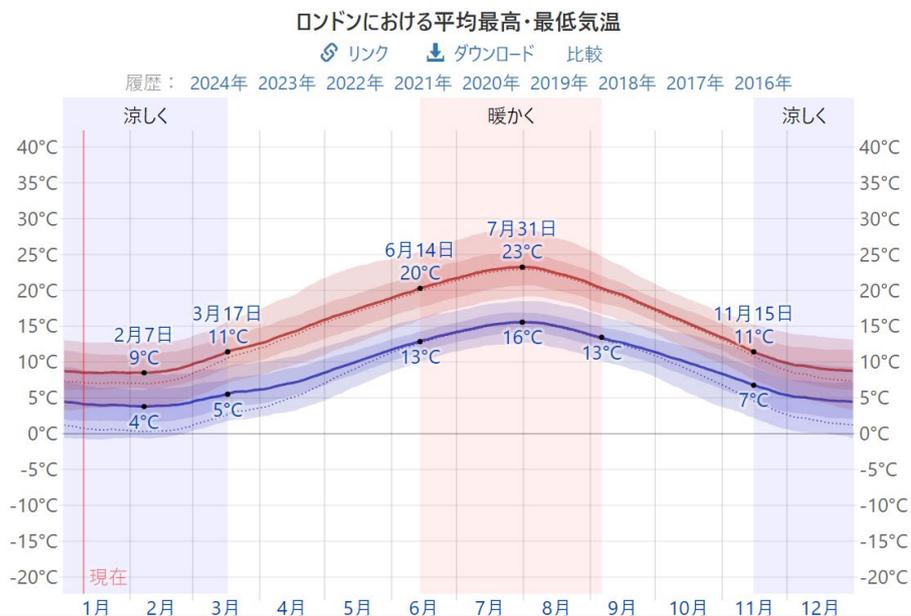


図 5 ロンドンの年間平均気温(出典：Weather Spark)

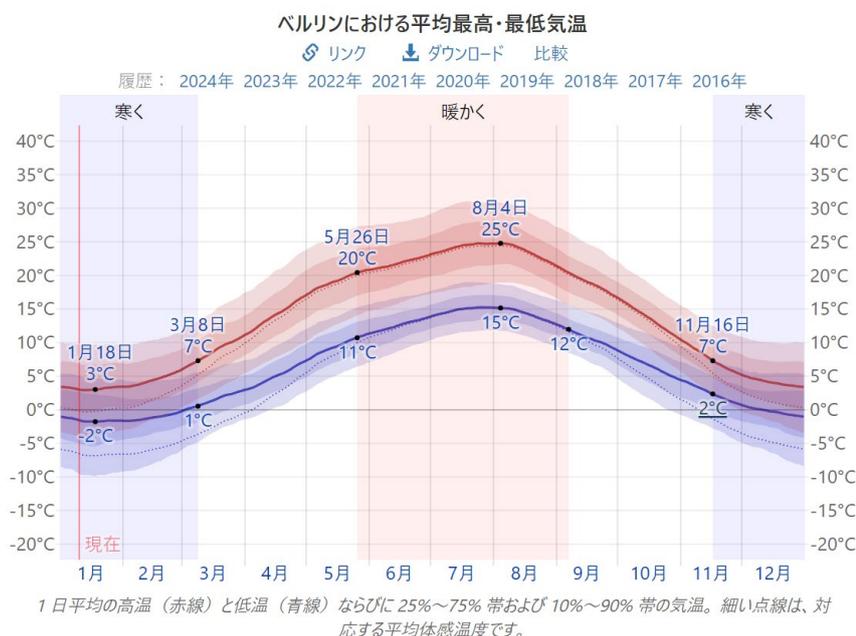


図 6 ベルリンの年間平均気温(出典：Weather Spark)

シーズン制の議論は2000年代から何度も浮上しては積雪地域における課題などから先送りとなっていたが、Jリーグは2023年12月にシーズン移行を決定した。2026年8月から欧州にそるえる形で、翌年5月までの新たなシーズン制のもとでリーグ戦が行われる。1993年の開幕から30周年の節目の年に、大きな決断に至った。Jリーグの野々村芳和チェアマンは12月19日の記者会見で「日本の夏場におけるパフォーマンスの低下が、明らかなデータとして出てきて、これは本当に変えないといけなかった」と、移行に至った背景を語った。Jリーグの理念の一つ目には「日本サッカーの水準向上及びサッカーの普及促進」がある。野々村チェアマンは「『サッカーの水準をどう上げていくか』というなかで、谷型のカーブを描くなかで選手をプレーさせるわけにはいかないと感じた」と語り、2年後に実現するシーズン移行がピッチ上に好影響をもたらすと期待を込めている。これまでは、夏場の過酷な状況での試合が続くことでプレー強度の面でパフォーマンスに影響が出ていたが、シーズン移行によって欧州に近いプレー水準の実現のための環境に近づくといえる。

第7節 研究の限界と今後の展望

この研究においては、ビッグクラブの中でもプレミアリーグのマンチェスター・シティ、リバプール、アーセナル、ブンデスリーガのバイエルン・ミュンヘンやドルトムント、

ライプツィヒの試合を対象としており、その他のクラブ、および全ての試合を対象とはしていない。

Jリーグも神戸、横浜M、広島が対象であり、さらにスペインやイタリア、フランスにおける強豪クラブの戦術の傾向は把握できていない。クラブチームと代表チームにおける違いについても把握されていない。

また、リーグ戦の試合映像およびデータを対象としており、ノックアウト方式における傾向の違いについても対象とはしていない。

探索的な研究にとどまらず、今後はより広範囲なデータ収集に基づいた研究が求められる。

第5章 結論

Jリーグでは、ボール奪取後に時間をかけて相手の守備を組織的に崩すポゼッションスタイルが好まれる傾向がある一方で、プレミアやブンデスではハイプレスを駆使し、ボール奪取直後に速攻を仕掛けるスタイルが一般的であることがインタビュー調査などから示された。さらに、プレミアやブンデスの上位クラブは、よりリスクが高い相手ゴールに近い位置でプレスを行うことに加え、ボール奪取後にカウンター以外にもポゼッションから得点を奪っており、この点はJリーグとの顕著な違いであった。日本人選手が欧州に適応し、さらにビッグクラブへのステップを考える上でこれらの戦術的な違いを認識することは重要である。

参考文献

- ・ 長澤和輝, 畔蒜洋平, 児玉ゆう子, & 平田竹男. (2021). 日本人プロサッカー選手の海外リーグ定着の要因-ドイツ・ブンデスリーガに在籍した選手の事例から. スポーツ産業学研究, 31(3), 3_351-3_359.
- ・ 栗山貴行. (2013). J リーグ選手を最終的にイングランド・プレミアリーグにステップアップさせるための最初の海外移籍に関する研究.
- ・ Navarro, F. J. F. (2015). Styles of Play in Elite Soccer: Identification and Definition of the Attacking and Defensive Styles of Play in the English Premier League and the 1st Spanish League (Doctoral dissertation, Liverpool John Moores University (United Kingdom)).
- ・ Anzer, G., Bauer, P., & Brefeld, U. (2021). The origins of goals in the German Bundesliga. Journal of Sports Sciences, 39(22), 2525-2544.
- ・ 鈴木健介, 浅井武, 平嶋裕輔, 松竹貴大, & 中山雅雄. (2019). プロサッカーリーグにおける得点機会獲得のための攻撃プレーの分析: パスプレーに着目して. 体育学研究, 64(2), 761-775.
- ・ Brîndescu, S., Datcu, F. R., & Buda, I. A. (2021). Study on the efficiency of advanced pressing in the Premier League. Baltic Journal of Health and Physical Activity, 13(6), 11.
- ・ 西部謙司氏コラム「スローフット J のリーダー的存在」(2022年9月15,16,17日掲載 神戸新聞、新潟日報、山形新聞)
- ・ 西部謙司氏コラム「スローフット 二つの潮流と融合」(2021年9月2、3、8日掲載 神戸新聞、新潟日報、河北新報)
- ・ UEFA.com 「 Club coefficients 」
<https://www.uefa.com/nationalassociations/uefarankings/club/#/yr/2024> (最終閲覧日 2024年1月9日)

- Deloitte Football Money League 2023, <https://www2.deloitte.com/uk/en/pages/sports-business-group/articles/deloitte-football-money-league.html> (最終閲覧日 2024 年 1 月 9 日)
- SYNCHRONOUS (シンクロナス) 「【独占告白】 遠藤航、リバプールのアンカー定着 「1 対 1 問題」 を本音で語る」 https://www.youtube.com/watch?v=6dcdP4IN_s8 (最終閲覧日 2024 年 1 月 9 日)
- footballista 「5、6m 高い位置で」 泰然自若の 30 歳、遠藤航が“リバプールの 6 番”に 進化を遂げるまで」
<https://www.footballista.jp/special/173874> (最終閲覧日 2024 年 2 月 12 日)
- footballista 「南野拓実、完全復活の舞台裏。モナコで常に意識してきた「それだけで 展開が変わる」ターンとポジショニング」
<https://www.footballista.jp/special/174335> (最終閲覧日 2024 年 2 月 12 日)
- Number Web 「酒井高德 30 歳が問いかける J リーグと欧州サッカーの“決定的な差” 「J のインテンシティーは低い」「アドレスは究極のレベルですよ」
<https://number.bunshun.jp/articles/-/850539> (最終閲覧日 2024 年 1 月 10 日)
- fbref.com , <https://fbref.com/en/> (最終閲覧日 2024 年 1 月 10 日)
- 賀川サッカーライブラリー 「セルジオ越後とフジタ」
http://library.footballjapan.jp/user/scripts/user/story.php?story_id=57 (最終閲覧日 2024 年 2 月 13 日)
- 賀川サッカーライブラリー 「1967 年のネルソン吉村」
http://library.footballjapan.jp/user/scripts/user/story.php?story_id=55 (最終閲覧日 2024 年 2 月 13 日)
- 賀川サッカーライブラリー 「ヨナシロと読売クラブとラモス」
http://library.footballjapan.jp/user/scripts/user/story.php?story_id=58 (最終閲覧日 2024 年 2 月 13 日)

- ・ 賀川サッカーライブラリー「ワールドクラスの大物オスカーを迎えた日産」
http://library.footballjapan.jp/user/scripts/user/story.php?story_id=61（最終閲覧日
 2024年2月13日）
- ・ Jリーグ公式サイト「Jリーグシーズン移行の検討」<https://www.jleague.jp/season-transition/>（最終閲覧日 2024年1月10日）
- ・ Jリーグ公式サイト「Jリーグ「シーズン移行」～次の30年に向けて～
chromeextension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.jleague.jp/img/pdf/2023_26796_j1.pdf（最終閲覧日 2024年1月10日）
- ・ Weather Spark 公式サイト「東京」
<https://ja.weatherspark.com/y/143809/%E6%9D%B1%E4%BA%AC%E9%83%BD%E3%80%81%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E5%B9%B4%E9%96%93%E3%81%AE%E5%B9%B3%E5%9D%87%E7%9A%84%E3%81%AA%E6%B0%97%E5%80%99>（最終閲覧日 2024年1月10日・東京）
- ・ Weather Spark 公式サイト「ロンドン」
<https://ja.weatherspark.com/y/45062/%E3%83%AD%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%B3%E3%80%81%E3%82%A4%E3%82%AE%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E5%B9%B4%E9%96%93%E3%81%AE%E5%B9%B3%E5%9D%87%E7%9A%84%E3%81%AA%E6%B0%97%E5%80%99>（最終閲覧日 2024年1月10日・ロンドン）
- ・ Weather Spark 公式サイト「ベルリン」
<https://ja.weatherspark.com/y/75981/%E3%83%99%E3%83%AB%E3%83%AA%E3%83%B3%E3%80%81%E3%83%89%E3%82%A4%E3%83%84%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E5%B9%B4%E9%96%93%E3%81%AE%E5%B9%B3%E5%9D%87%E7%9A%84%E3%81%AA%E6%B0%97%E5%80%99>（最終閲覧日 2024年1月10日）

謝辞

本稿を執筆するにあたり、指導教員の平田竹男先生には構想の段階から様々な面でご指導を賜りましたこと御礼申し上げます。

本研究を通じて、スポーツ記者として触れてきたサッカーという競技の奥深さや面白さにあらためて気づくことができました。Jリーグ30周年という節目の年に入学する機会に恵まれ、日本や欧州のサッカーと向き合う時間を持てたことに感謝いたします。

副査の中村好男先生、児玉ゆう子先生、畔蒜洋平先生には、幅広い視点からのアドバイスや論文作成において細かいところまでご指導をいただきました。感謝申し上げます。

また、本研究を行うにあたり、快くインタビューに応じていただきました選手の皆さまや関係者の皆さま、さらに平田研究室の学生修士の皆様、論文作成にあたって苦楽をともにした平田研究室18期の皆様にも感謝申し上げます。

この研究の成果を、日々のサッカー報道に生かしながら、さらに広く日本においてサッカー文化が花開くよう尽力してまいりたいと存じます。

皆様のお陰で自分の成長を感じることができた1年となりました。ありがとうございました。